

# 青柳河岸跡

—増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡発掘調査報告書—



2009.3月

山梨県教育委員会  
国土交通省関東地方整備局

# 青 柳 河 岸 跡

—増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡発掘調査報告書—

2009. 3月

山梨県教育委員会  
国土交通省関東地方整備局

## 序

本書は、国土交通省関東地方整備局による増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

青柳河岸は、鰐沢河岸・黒沢河岸とともに「甲州三河岸」として江戸時代に整備された富士川舟運の拠点であります。江戸幕府の直轄地であったこともあり、甲府盆地が三つの代官所の支配下におかれ从からは、甲府盆地の年貢米の多くはそれぞれの河岸に設けられた蔵に集積され、御廻米として江戸に送られていました。鰐沢河岸は甲府代官所の、黒沢河岸は石和代官所の、そして青柳河岸は市川代官所の管轄にあったのです。

青柳河岸は、江戸時代の寛永15年に米蔵が建てられ、御廻米を中心とした河岸としてその機能を果たしていましたが、維新以後は明治7年に富士川運輸会社として新たな物資輸送の拠点として生まれ変わりました。その後約30年の時が経った明治36年、中央線の開通などに伴ってこの会社も解散することとなり、青柳河岸は姿を消していったのです。

河岸に建てられていた米蔵は、解散後の明治38年に地元の秋山源兵衛氏が払い下げを受けて移築し、現在まで残されています。この建物は何度となく改修されましたが、その構造については旧状を保っています。

ところで、本県にあって明治時代は水害の多い時代でもありました。特に明治14、18、29、40年は、大洪水の年でした。18年には大洪水に際し釜無川（富士川）の大改修工事が行われています。29年には、竜王町（現在の甲斐市）にある信玄堤が決壊したほどの洪水があり、40年の出水では笛吹川の川筋が大きく変わり、現在の流路となりました。

青柳河岸については、大正年間に富士川土堤が大改修されたことから、流路が東に寄せられたため、河岸のあった場所の多くは河川敷となってしまったようです。

以上のような洪水や土堤の改修などにより、青柳河岸跡の原状は相当変化しているものと推測できます。

今回の発掘調査では、河岸跡の全体像をとらえることはできませんでしたが、出土した陶磁器類や瓶類などから、河岸が廃止されてからしばらくの期間を経た後、土堤状の高まりが構築され、その後陶磁器類や瓶類などが投げ込まれた状況が確認されました。また、河岸本体は、川の中州辺りにまで延びていることが推測できるとともに、更にここから町並み方面へと続く道の存在も明らかになりました。

これらの成果が、富士川舟運にかかる歴史を解き明かすことにつながれば幸いです。

最後に、発掘調査および報告書作成にあたり、さまざまご協力をいただいた関係者や関係機関の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成20年11月30日

山梨県埋蔵文化財センター  
所長 新津 健



## 青柳河岸跡の概要

山梨県には、大きな河岸跡が三ヶ所あります。一つ目は、鰐沢町の「鰐沢河岸跡」、二つ目は、市川三郷町（旧市川大門町）にある「黒沢河岸跡」、三つ目は、増穂町の「青柳河岸跡」です。

旧市川大門町と増穂町は、南流する富士川によって東西に分けられています。現在、両町を結んでいるのは、富士川に架けられた「富士川大橋」（平成9年建設）です。ですから、青柳河岸が活発だった頃は、高田の渡しがあり、富士川大橋の上流に建設された三郡橋架橋完成（昭和47年三郡東橋、昭和51年三郡西橋）までの間、渡し舟で市川大門町と増穂町を行き来していました。

右の写真を見てください。この写真の手前が、平成10年に発掘調査を実施した増穂町の「町屋口遺跡」です。奥の左右に流れているのは富士川で、左が北で右が南です。そして、山が見えている付近が市川三郷町で、川に架けられているのが富士川大橋です。



右の写真は、五明川と富士川に挟まれた場所で、試掘調査によって「青柳河岸跡」の本体が埋まっていることが確認されています。

さて、今回の発掘調査では、土堤状に高く砂が盛られた上に、陶磁器類や葉бинなどがたくさん見つ



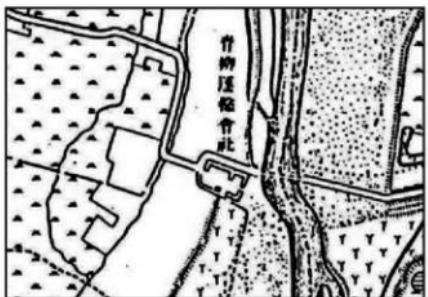
左の写真は、今回報告する「青柳河岸跡」の発掘調査前の状況です。富士川大橋の上から下流側に撮影したもので、この細い川は、「五明川」といいます。

青柳河岸跡は、五明川の工事などにより一部壊されました。大部分はこの川の更に左の富士川までの間に埋まっています。



かりました（左の写真）。調査の結果、これらのは、青柳河岸（青柳運輸会社）が解散となった後に投げ込まれたことがわかりました。土堤状の高まりを掘り下げていくと粘土の層が3面あり、どの粘土層も上面には小砂利が敷かれ非常に堅く締まった道がありました。

しかし、これらの道は、河岸が解散した後に掘削されたので、道の続き方や広さなどはわかっていない



せん。

左の地図は、明治 21 年に作成されたもの的一部分で青柳の河岸が描かれています。青柳村明細帳には、「御藏道長四七四間、横二間」(天保三年)と書かれているようです(「富士川水運」山梨県歴史の道調査報告書第 19 集 山梨県教育委員会 より)。

この測量図から、明治 21 年のこの段階では、青柳河岸がまだ健在であったことがわかります。その後、明治 36 年に解散し、38 年には御米蔵が移築されました。

出土品の中には、電線を巻き付けるための碍子(がいし)が見つかっています。明治 32 年に芦川に発電所が建設され、翌年 33 年には市川大門町や甲府市の中央部に電気が送られました。増穂町に初めて電灯がついたのは、明治 45 年のことでした(「増穂町誌」史料編)。

また、別の出土品では徳利に書かれた「不知火」の文字があり、明治 27 年に商標が登録され専用権が得られています。増穂町の秋山酒店や秋山酒造「正宗」、そして皿の内面に書かれた「イチリキ 正宗」(外面には青柳町 一力萬屋醸造店と書かれている)など、地域の歴史を知る手がかりとなる品物も見つかりました。

薬ビンでは、蘆澤醫院・芦澤醫院(旧字体の蘆澤(新、芦沢)と醫院(新、医院))、久保内科醫院については、増穂町に古くからあった医院でしょうか。回春堂醫院、横手醫院については、増穂町或いはその付近の医院と思われます。特に、薬ビンについては、鰐沢河岸跡でも多量に見つかっています。様々な種類の薬ビンは、鰐沢町に存在していた医院名などでしょうか。

その他のガラス瓶では、目薬瓶、ラムネ瓶、ワイン瓶、ビール瓶、カルピス瓶などが見つかっています。そして、生活用品としての茶碗、湯呑み、皿、鉢、急須や土瓶などの陶磁器類も見つかりました。

しかし、繁栄していた頃の青柳河岸に伴う出土品ではないものの、時代を反映したこれらの製品については、今は見ることの少ない品物ばかりです。



## 例　言

- 1 本書は、山梨県南巨摩郡増穂町青柳地内に所在する青柳河岸跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は増穂地区築堤護岸整備事業に先立ち、山梨県教育委員会が国土交通省関東地方整備局から委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成19年6月4日から同年9月28日まで、基礎的整理作業は同年11月1日から平成20年3月31日、本格的整理作業は平成20年5月26日から同年11月30日までである。
- 4 本書の執筆・編集は、山本茂樹と猪俣一弘が行った。
- 5 石垣測量用写真撮影、航空写真撮影および測量図化作業は、株式会社シン技術コンサルに、測量杭については昭和測量株式会社へ委託した。型紙摺絵や銅版転写についての実測・トレースは、株式会社アルカに委託した。
- 6 本書に係る資料は、山梨県埋蔵文化財センターが一括保管している。
- 7 発掘調査および整理・報告書作成に係る組織は以下のとおりである。

調　査　主　体　山梨県教育委員会

調　査　機　関　山梨県埋蔵文化財センター

発掘調査担当　山本茂樹・猪俣一弘

発掘調査作業員　石井弘文、河野逸弘、齊藤重信、神沢正孝、久保建司、新谷和美、依田和美、土井みさほ、田中初子、穢山隼也、深沢和樹、マスード・オゼール

(平成19年6月4日～9月27日)

H19 基礎的整理作業　新谷和美、小池美穂子、土井みさほ、依田和美、久保建司

(平成19年11月1日～平成20年3月14日)

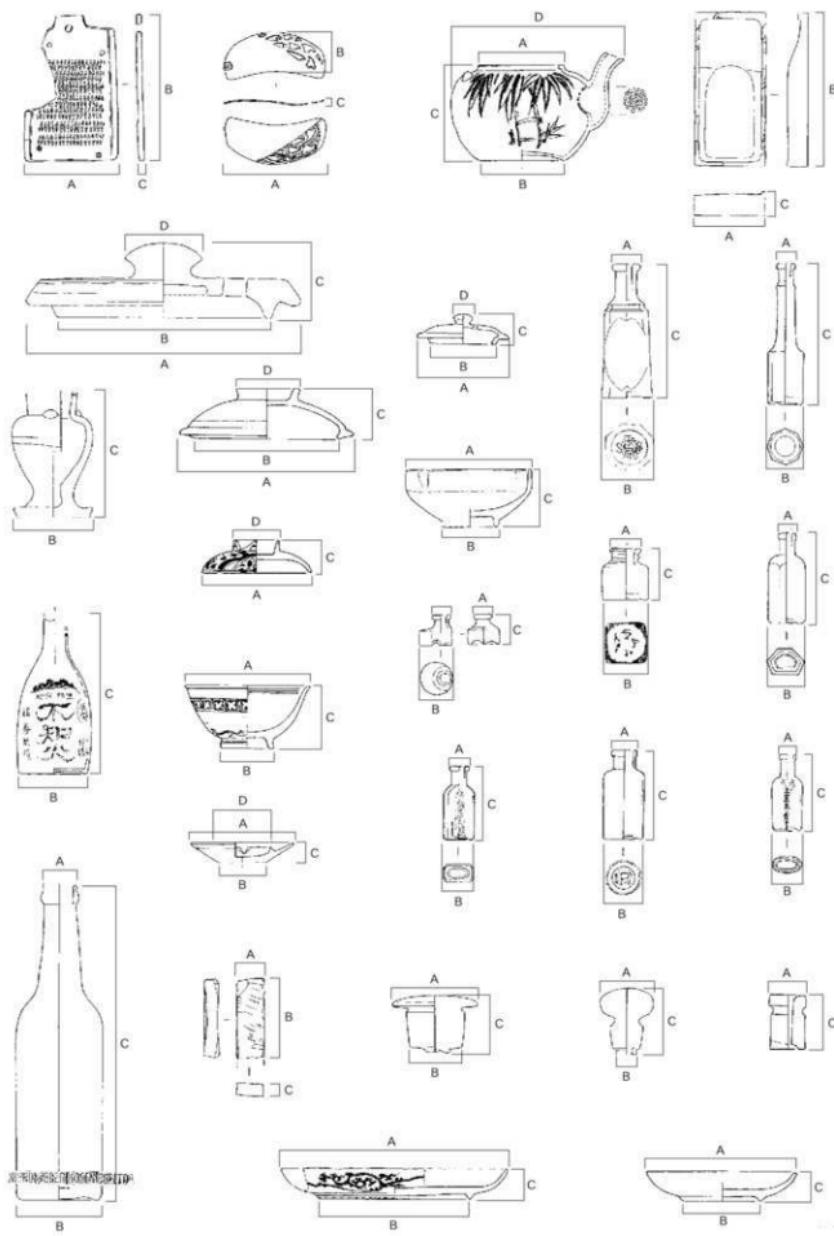
H20 本格的整理作業　新谷和美、小池美穂子、依田和美

(平成20年5月26日～6月20日)

原稿執筆作業など　平成19年7月～平成20年11月30日

## 凡　例

- 1 出土遺物の実測図については、出土位置および番号が付してある。また、縮尺は1／3である
- 2 各実測の計測位置は、凡例図で示したとおりである。



凡例図

## 本文目次

口 絵

序

例 言

目 次

第1章	調査の経緯と経過	
第1節	調査に至る経緯	----- 1
第2節	調査までの協議と調査経過	----- 1
第2章	地理的環境と歴史的環境	
第1節	地理的環境	----- 2
第2節	歴史的環境	----- 2
第3節	青柳河岸の歴史と関連事業および周辺の調査	----- 4
第3章	検出された遺構と出土品	
第1節	遺構	----- 7
第2節	各ブロックの出土品について	----- 14
第4章	まとめ	

## 挿 図 目 次

第1図	青柳河岸跡とその周辺遺跡	----- 4	表 - 5	----- 23	
第2図	青柳河岸跡および周辺の変遷地図	----- 5	表 - 6	----- 25	
第3図	青柳河岸跡遺構全体図	----- 8	表 - 7	----- 26	
第4図	石垣の全体図	----- 9	第14図	磁器（1）	----- 28
第5図	石垣平面図・立面図および土層図	----- 10	第15図	磁器（2）	----- 29
第6図	土堤状の高まりおよび断面図	----- 11	第16図	磁器（3）	----- 30
第7図	土堤状の高まりの下層の状況図・断面図および土層図	----- 12	第17図	磁器（4）	----- 31
第8図	土堤状の高まり土層図・Fブロック平面・断面図・7トレンチ土層	----- 13	第18図	磁器（5）	----- 32
第9図	Aブロック 出土状況	----- 16	第19図	磁器（6）	----- 33
第10図	Bブロック 出土状況	----- 17	第20図	ガラス製品（1）	----- 34
第11図	Cブロック 出土状況	----- 18	第21図	ガラス製品（2）	----- 35
第12図	Dブロック 出土状況	----- 19	第22図	ガラス製品（3）	----- 36
第13図	Eブロック 出土状況	----- 20	第23図	ガラス製品（4）・陶磁器（1）	----- 37
表 - 1		----- 21	第24図	陶磁器（2）・石製品	----- 38
表 - 2		----- 21	第25図	陶磁器（3）	----- 39
表 - 3		----- 22	第26図	陶磁器（4）・瓦・硯	----- 40
表 - 4		----- 22	第27図	陶磁器（5）	----- 41
			第28図	陶磁器（6）・瓦・石板・植木鉢	----- 42
			第29図	砥石・石筆および古錢	----- 43

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

一般国道52号改築工事に伴い、平成8年2月に遺跡確認調査が実施され、その結果、江戸時代後期の陶磁器や金属製品などが出土したこと、そして東には富士川舟運の青柳河岸跡があったことなどから「町屋口遺跡」と名が付され、平成10年5月20日から同年12月22日にかけて本調査が実施された。

この調査では、青柳河岸に続く河岸御蔵道が発見されるとともに、江戸時代末から明治期にかけて描かれた絵図の内容のとおり「作場通ひ道」も確認された。なお、この「作場通ひ道」の下には、水路があったことも明らかにされた。

河岸御蔵道の両側では、明治頃の水田跡が確認され、さらに下層を掘削したところ、部分的ではあるが度重なる洪水のために埋まった江戸時代の水田面の一部が確認されるにとどまった。

また水路については、江戸時代末頃まで使用されていたものと思われ、洪水による砂によって埋没していた。この砂を掘り下げていくと水路内には、陶磁器類や木製品が出土し、また先端の尖った杭が多数見つかった。これらの杭は、水位が上昇したり下降したりすることによって木の心が残ったためと考えられる。その後、洪水によって埋まった水路の上に道として利用するために粘土を敷き、その両側には補強として丸太杭が打ち込まれていた。この道は、絵図から「作場通ひ道」であることが明らかにされた。

このような調査結果から富士川護岸工事では、青柳河岸跡の本体部分にあたる箇所であること、そして河岸御蔵道の存在などから、平成15年度に施行面積160,000m<sup>2</sup>に試掘溝を36本設定して調査が実施され、その結果、約13,525m<sup>2</sup>が適切な保存を要することとなった。

国土交通省甲府河川国道事務所と学術文化財課との協議を進めていく中で、遺構をなるべく残す方向で工事施工方法など変更を行い、今回の工事箇所での最終的な面積は2,250m<sup>2</sup>の発掘調査となった。

## 第2節 調査までの協議と調査経過

調査実施前に、国土交通省甲府河川国道事務所、学術文化財課、埋蔵文化財センターと協議を進め、発掘調査を実施した。

平成15年1月19日 試掘調査現地協議

平成15年1月26日～同年12月16日まで試掘調査を実施

平成16年 2月 学術文化財課へ試掘調査結果報告書を提出

平成18年1月14日 防災ステーション建設などに係る協議実施

平成19年 3月 9日 青柳河岸跡発掘調査についての現地協議実施

平成19年 4月24日 青柳河岸跡発掘調査について事前協議実施

平成19年 6月 4日～22日 重機による表土掘削

6月21日 安全管理点検日

平成19年 6月23日 作業員面接

平成19年 7月10日 現地に器材を搬入

平成19年 7月11日から発掘調査を開始

平成19年 7月19日 安全管理点検日

7月24、25日 調査区に測量杭設置

7月30日 教理文第306号にて学術文化財課へ99条提出

8月10日 安全管理点検日

9月19日 安全管理点検日 石垣立面図委託実施

9月27日 空中撮影委託実施 石垣の断面図の付け足しおよび器材の片づけ、発掘調査終了  
10月 教埋文第482号にて遺物発見通知および教埋文第486号にて発掘調査終了報告提出  
平成19年11月 基礎的整理作業開始  
平成20年 3月 基礎的整理作業終了および学術文化財課へ実績報告書の提出  
平成20年 5月 報告書作成のための本格的整理作業開始  
平成20年 6月 本格的整理作業終了  
平成20年12月 報告書の入校  
平成21年 3月 報告書刊行

## 第2章 地理的環境と歴史的環境

### 第1節 地理的環境

青柳河岸跡は、山梨県南巨摩郡増穂町青柳地内に所在する。

増穂町は、山梨県の南西部で、甲府盆地の南端に位置し、町の総面積は 65.17 km<sup>2</sup> であり、86%が林野に占められている。また、大きく分けて西部の山間・丘陵地と東部の平野部からなり、西部の山間地には南アルプス自然公園に指定され、アヤメの群生地として知られる櫛形山(2051.7 m)をはじめ丸山(1910.3 m)・鳥森山(1907.6 m)・八町山(1521.1 m)など巨摩山地の高山がそびえる。東部の平野部は、町の東端に流れる富士川の支流である利根川と戸川の扇状地ないし富士川の氾濫原にになっている。人口の多くはこの東部に集中し、商・工業の発展や住宅地域の拡大が進んでいる。

青柳河岸跡は、富士川の右岸に位置し、この富士川は、源を南アルプス北部の甲斐駒ヶ岳 (2,966 m) 北西から八ヶ岳裾野の峡谷を流下し、大武川、塩川、御動使川などを合流させ、さらに甲府盆地南部で甲武信ヶ岳 (2,475 m) を水源とする笛吹川と合流し、その後、山間部をぬって日本一深い湾のひとつの駿河湾に注いでいる。

その流域は長野県・山梨県・静岡県の三県にまたがり、流域面積 3,990 km<sup>2</sup>、幹川流域延長 1,28 km で全流域のうち約 90% は山地である。また富士川は、最上川、球磨川とならんで日本三大急流の一つに数えられるようになり河床勾配は急で直轄区間の河口から韋崎市武田橋まで約 85 km の平均河床勾配は 1/240 となっている。

さて、本遺跡のある青柳地区は、増穂町の南東部にあたる。西部の国道 52 号線周辺は、商業地・居住地が広がり、東部は水田が広がる農業地域となっている。東端には釜無川と笛吹川が合流してできる富士川があり、駿河湾に向けて甲府盆地内の水を排出している。周辺は甲府盆地の最低所にあたり、標高は 242 m ほどで、古くから多くの水害にさらされてきた地域といえる。

### 第2節 歴史的環境

増穂町内での遺跡は、現行の遺跡台帳で 40 遺跡あまりとなっていて、西部の山地、丘陵山裾部、東部扇状地内の涌水列に集中している（遺跡名の次に時代その次にある（）、または遺跡名の次にある（）の番号は第 1 図の遺跡番号と一致させてある）。

山地では、平林大平遺跡（縄文・平安）（1）、平林向林遺跡（縄文）（2）、小室菖蒲池遺跡（縄文～古墳）（3）、小室檜平遺跡（縄文～古墳）（4）、高下下高下遺跡（縄文～弥生）（5）などが知られている。いずれも丘陵の段斜面を利用した縄文時代中期を中心とした住居跡や土器・打製石斧・石棒等が発見されている。

丘陵山裾部としては、春米北山遺跡（縄文・古墳）（6）、春米上平遺跡（縄文～古墳）（7）、春米中尾田遺跡（縄文・弥生）（8）、大久保広見遺跡（弥生）（9）、最勝寺平野遺跡（縄文～古墳）（10）、最勝寺西の入遺跡（縄文～古墳）

(11)、最勝寺大堀田遺跡（縄文・古墳）(12)などが知られているが、多くは縄文から古墳時代もしくは縄文から弥生時代の複合遺跡である。中でも、弥生時代～古墳時代の集落跡が発見され、一部に火災で焼失された住居が確認されている最勝寺平野遺跡は興味深い。また、弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡や縄文時代早期末の条痕文土器、古墳時代前期のS字状口縁台付甕等が発見された大明神遺跡（縄文～古墳）(13)が知られている。その他に、權現堂遺跡（平安）(14)は、泥塔焼成遺構や泥塔が出土し、中世の仏教遺跡として注目されている。

東部扇状地内の涌水列に沿って分布するのは、小林竹重遺跡（弥生・古墳）(15)、安清の池遺跡（弥生・古墳）(16)、長沢平池遺跡（弥生・古墳）(17)、長沢長池遺跡（弥生・古墳）(18)、大柄遺跡（弥生・古墳）(19)、青柳遺跡（弥生・古墳）(20)などがあるが、ほとんど弥生～古墳時代の遺物の散布地で、その時期水田開発に伴い、より利便性ある水源を活用できる土地を求めた結果と窺える。また、最勝寺地区、春米地区の扇状地端部には古墳がまとまって築造されている。最勝寺地区では大塚古墳(21)、鎌塚古墳(22)、馬門古墳(23)、無名塚1(24)、2号古墳(25)などからなる古墳群が分布し、春米地区には、銅鏡や勾玉の出土が知られ、5世紀代の築造とされる法華塚古墳(26)をはじめ、狐塚古墳(27)、塚穴古墳(28)、二十三夜塚古墳(29)などが確認されている。古墳時代後半有力集団が春米・最勝寺両地区にそれぞれ分かれ、権力争いをしていったのではないかと想像が膨らむ。

増穂町以外では、本遺跡近隣の市川三郷町にある縄文時代中期の集落跡が発見されている宮の前遺跡（縄文）(30)や弥生～鎌倉時代の水田跡や弥生時代後期の土器片、動・植物遺存体が出土している大師東丹保遺跡（弥生～戦国）(31)、鎌倉時代の水田跡や戦国時代末期の建物跡さらに江戸時代の村の跡が確認されている宮沢中村遺跡（鎌倉～近世）(32)が南アルプス市（旧甲西町）に存在する。

本遺跡である青柳河岸は、鰐沢河岸と黒沢河岸とともに甲州三河岸の一つであり、富士川開削後の水運の拠点となつたところである。寛永十五年（1638）には米蔵が置かれ、市川代官支配下村の江戸廻米が扱われ、経済文化交流の大きな役割を果たした。また、河岸から荷揚げされた物資や人の輸送するための交通路として、現在の国道52号は、かつて駿河と信州を結んだ「駿往還」と呼ばれた主要道で、青柳の追分から蒲沢宿を経て、韋崎に続いている。一方、追分から甲府方面に延びる道を「駿州往還」、蒲沢宿から東の市川代官所へ延びる道は、「市川往還」と呼ばれた。さらに、青柳河岸対岸には河岸を結ぶ青柳の渡し（高田の渡し）が昭和の時代まで存在し、駿往還から市川大門方面に通ずる大事な通路の役割を果たした。

青柳河岸の下流には、三河岸の内の鰐沢河岸、黒沢河岸があった。鰐沢河岸は、甲府代官所支配下村の江戸廻米を扱うと共に、信州の諫謫藩、松本藩にも利用された。発掘調査は平成8年から数回行われ、御蔵台跡などの遺構や甲州金老分判をはじめ、近世・近代の陶磁器やガラス製品などが出土している。

黒沢河岸は、「甲斐国志」によると、石和代官所支配下村の年貢米を扱い、田安家（徳川八代將軍吉宗の次子宗武）の御米蔵もあったようである。「ハナグロ船」と呼ばれ、他の河岸船と識別するため船先を黒く塗ったと記述されている。

この時代の遺跡になると、青柳地区で本遺跡の西側、富士川の氾濫原に立地する町屋口遺跡（近世・近代）、藤田池遺跡（近世・近代）がある。両遺跡とも、一般国道52号線（甲西道路）改築工事に先立ち、町屋口遺跡が1998年度、藤田池遺跡が1998年度と2002年度の2回、山梨県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された遺跡である。江戸時代末～明治時代における水田跡や水路跡・杭列などが検出されているが、町屋口遺跡では青柳河岸に通ずる「作場通り道」（青柳村絵図参照）の保護施設と思われる杭が検出され、道の上面には小砂利などが敷かれ堅く踏みしめられた状況が伺えた。なお、この「作場通り道」の下には、水路が形成されていたことが明らかにされ、水路内にはたくさんの杭が打たれており杭の外側には廃棄された舟板材で水路を囲い補強がなされていた。

明治時代は、水害の多い時代であり、日本はオランダの治水技術を導入し、連続する堤防を築きはじめた。特に明治14.18.29.40年は大洪水の年で、18年には大洪水に際し釜無川の大改修工事が行われた。明治29年には、信玄堤が破壊されたほどの洪水があり、中でも明治40年の出水では、富士川流域は壊滅的な損害を受け、笛吹川の川筋がこの時に変わって現在のような流路となった。



第1図 青柳河岸跡とその周辺遺跡 (1/50,000)

增穂町誌によると元禄2年（1689）7月7日大洪水にて青柳河岸御米蔵、川積場並びにお蔵道破損、鰐沢河岸御米蔵流出。文政11年（1828）富士川洪水、鰐沢地内浸水。慶応3年（1867）8月富士川洪水、鰐沢地内浸水。明治18年（1885）6月29日降雨、7月30日大洪水にて鰐沢運輸会社一部流出、各地の堤防決壊。明治24年（1891）12月降雨のため堤防決壊、青柳家屋耕地へ浸水。明治30年（1897）9月8日降雨により河川増水、坪川決壊、富士川満水となり青柳へ浸水。明治38年（1905）8月戸川堤防決壊。昭和10年（1935）8月豪雨にて戸川堤防決壊。9月降雨により富士川増水、鰐沢地内用悪水路の逆流と富士川堤決壊。昭和20年（1945）9月豪雨のため戸川堤防決壊。昭和29年（1954）9月、14号台風により堤防決壊、戸川上流赤石鉱泉の前山崩壊し、17万立法メートルの土砂が戸川へ流れ込む。昭和34年（1959）8月7号台風により豪雨、富士川増水、13日夜には定位置にある河川は逆流し、増穂町の北に位置する甲西町の宮沢は湖水化した、と書かれている。

このように、甲府盆地の西部から南部は、江戸時代から昭和時代にかけて河川の洪水が続いた。

（図中の★が青柳河岸跡）

### 第3節 青柳河岸の歴史と関連事業および周辺の調査

富士川水運については、慶長12年、あるいは16年という見解がなされ、慶長19年頃から本格的な舟運が始まつたとも考えられている。開始時期は明確に定まってはいないものの、慶長年間に開始されたことは事実である。ここで青柳河岸に関係する事象を掲げておく。

寛永15年（1638）、青柳河岸に御米蔵が建つ（最終的に河岸は、東西 50.9m・南北 54.54m（面積約 2776m<sup>2</sup>）

の広さがあり、ここに東西 36m・南北 7.2m（建坪 260m<sup>2</sup>）の御米蔵があったという）。

元禄 2年（1689）、大洪水のため、青柳河岸の御米蔵など破損する。



第2図 青柳河岸跡および周辺の変遷地図

- 文化 14年(1817)、天神ヶ淵の大改修工事が行われる。
- 安政 1年(1854)、安政の大地震により、青柳の御米蔵など破損
- 明治 1年(1868)、青柳村および49町歩冠水
- 2年(1869)、甲斐府を改め、甲府県となる。
- 4年(1871)、甲府県を山梨県に改める。
- 5年(1872)、富士川舟運の年貢米の廻送は終止符を打つが、舟運はなお続けられていく。
- 7年(1874)、富士川運輸会社設立
- 8年(1875)、富士川通船規則制定
- 10年(1877)、青柳地内の富士川堤防改修
- 18年(1885)、鰐沢河岸運輸会社の一部流出
- 19年(1886)、夏から富士川曳舟運上に帆力を利用する。
- 23年(1890)、富士川通船営業取締規則が制定
- 26年(1893)、青柳運輸会社(青柳河岸)の発足
- 32年(1899)、馬車鉄道が、甲府から小井川・南湖を経て富士川舟運の起点鰐沢まで開通。芦川の下流に400扣ワットの芦川第一発電所が建設される。
- 33年(1900)、芦川発電所より送電が開始され、市川大門町283灯と甲府市中央部に882灯に電灯供給が開始された。
- 36年(1903)、中央線が甲府まで開通し、青柳運輸合資会社は解散となる。御米蔵は38年まで河岸に存在する。
- 38年(1905)、秋山源兵衛が富士川運輸会社廃止のとき払下げを受け45日間かけて解体し、源兵衛の屋敷西側に移築された。
- 39年(1906)、2500扣ワットの芦川第二発電所を建設し、市川大門町(現在の市川三郷町)と甲府城東地域へ電力の供給区域が拡大される。
- 40年(1907)、甲府電力会社が、増穂町、鰐沢町に電力を供給。
- 45年(1912)、青柳村に初めて電燈がつく。
- 大正 9年(1920)、富士身延鉄道が富士・身延間開通。内務省直轄富士川改修工事着工(12年継続)
- 大正11年(1922)、富士川運輸会社(鰐沢河岸)が解散
- 大正14年(1925)、青柳(秋山酒造店)に初めてラジオがお目見え
- 大正年間に富士川の土堤が大改修された。
- 昭和 3年(1928)、富士身延鉄道前線開通
- 昭和28年度から五明川、横川の内水対策として五明合流調整工に着手し、昭和42年度に完成
- 平成 9年(1997)、富士川大橋竣工
- 平成10年(1998)、一般国道52号改築事業により増穂町「町屋口遺跡」と「藤田池遺跡」の発掘調査
- 平成14年(2002)、「藤田池遺跡」第2次調査
- 参考文献
- 「増穂町誌(上・下)」、「山梨県の百年」有泉貞夫 2003 山川出版社、「鰐沢河岸跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集、「鰐沢河岸跡II」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第224集、「鰐沢河岸跡III」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第235集、「鰐沢河岸跡IV」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第238集、「鰐沢河岸跡V」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第245集、「鰐沢河岸跡VI」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第254集、「町屋口遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第177集、「藤田池遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第204集、「甲斐の道づくり・富士川の治水」歴史資料集 建設省関東地方建設局 甲府工事事務所 平成元年、「富士川舟運遺聞」望月誠一 2007年

# 第3章 検出された遺構と出土品

## 第1節 遺構

### 1 石垣（石列）について

発掘調査地点は、富士川（釜無川）と併走する五明川の右岸で、この河川に沿って 2,250m が調査対象範囲である。五明川の上流側から重機により遺構確認面までを掘削したところ、第3図のように調査区の上 1/4 の箇所で、ほぼ南東から北西方向に転々と石が並んでいることが確認された。

このため石の状況を明確にするために探査棒を刺して、石の方向や深さを調べた。当初、この転々と並んだ石は、畑などの境界として設けられたものと考えられたことから、石列として調査を行った。

データ 場所：調査区の北東 位置：G-1 3 グリッド～I-1 3 グリッド（第4図参照）

標高：242.30m 前後 石列の長さ：約 11.6m 配された石の幅：1.00m 前後

石列の状況を知るために、石列に直行する形で幅約 50cm、長さ約 150cm の試掘溝を設定し掘削したところ、数段に亘って石を積んだ状況が確認された。このことにより、土層図作成のためのベルトを 4 本設置し掘り下げを行った（第4、5図、写真図版第3図）。それぞれの区画は、東側から 1 区画（土層図ポイント A-A'）、2 区画（土層図ポイント B-B'）・・・と番号を付し、西側を 5 区画（第4図、土層図ポイント E-E'）とした。

調査の結果、石列として考えられた遺構は、石垣であることが明らかとなった。それは、第5図の土層図のとおり石が 3段から 4段積まれており、しかも石の面が北側に向いて構築されていたことから意識して石が積まれていたことによる。第5区画では、骨、陶磁器片が出土し、特に陶器片では、土堤状の高まりで見つかった破片と接合された。

土層状況は、1、2、4 区画では南から北へ傾斜しながらの堆積が認められるものの、3 区画では逆に北から南への堆積状況が見える。そこで、第4図のように上流側（北方向）に試掘溝を延長して調査したが、土層堆積は水平堆積を示すだけであった。なお、4 区画の堆積は、石垣が破壊された後の堆積であり、南から北へ土砂が流れ込んだものである。このことから、石垣を境としてその前面には何もなかったことを意味しているものと思われる。また、石垣の裏に用いるグリ石は非常に少なく、確認されたグリ石の状況から石垣の高さもあまり高くはなかつた可能性がある。

9月19日、石垣の積み方記録のため、委託業務により写真実測のための撮影作業を行う。

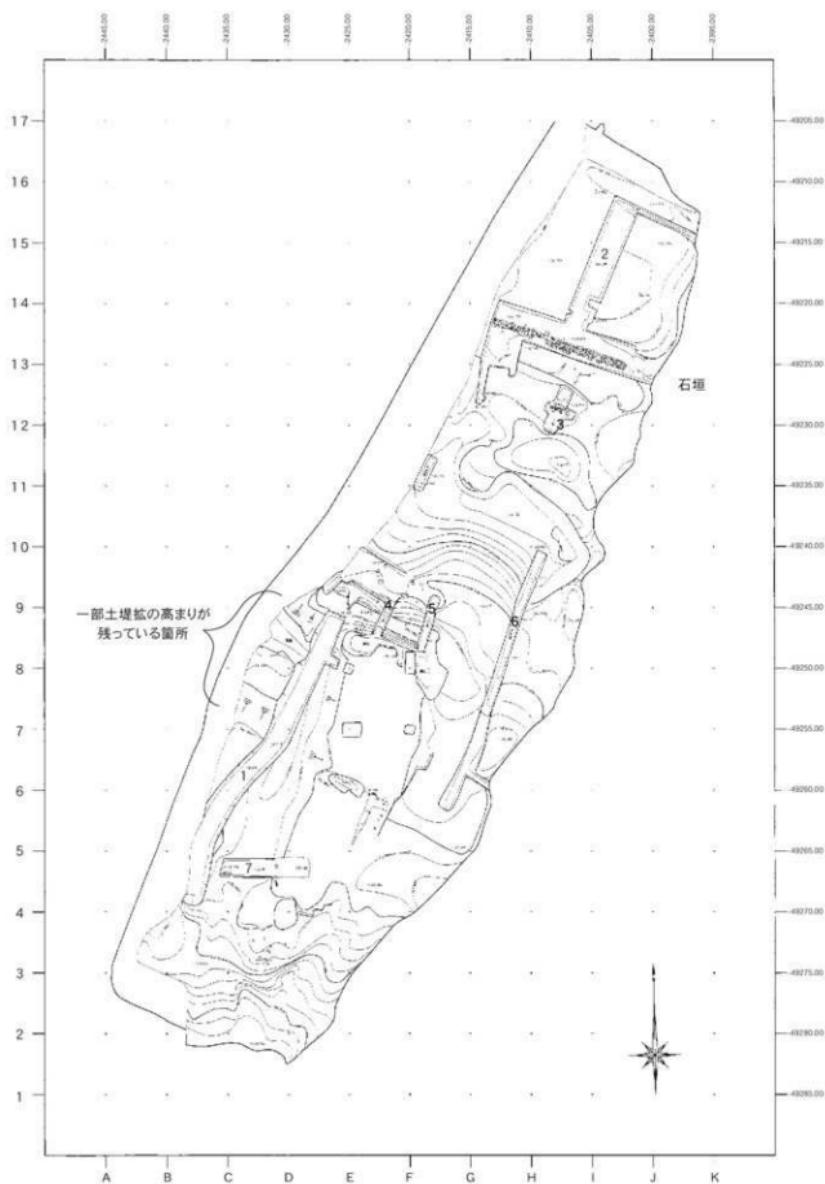
### 2 土堤状の高まりについて

土堤状の高まりは、調査区の中央より南側に位置し、南東から北西方向に延び、台形状を呈する。土堤状を断ち割った箇所での土層図面（第8図 B-B'）は、B'側（南側）において土堤の高まりから落ち込んでいく状況が認められる。

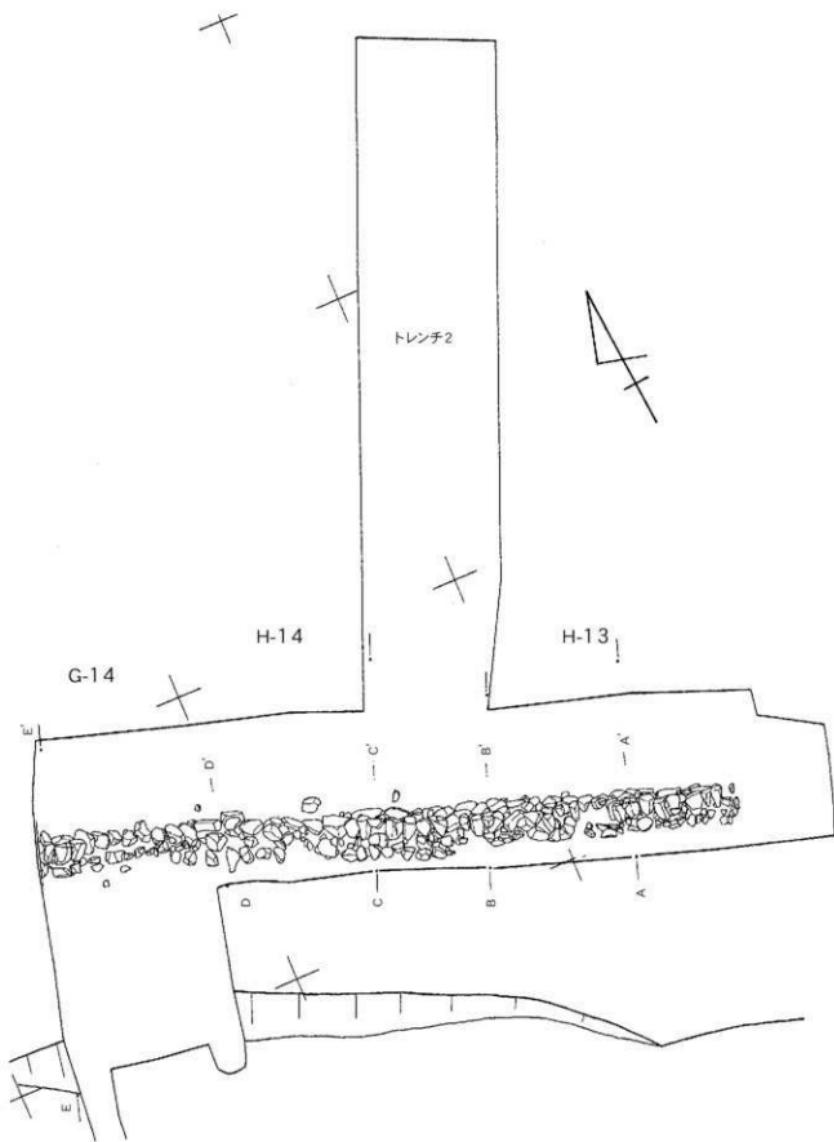
第VII層から上層にかけての層については、埋め立ての層として捉えられる。また全体の堆積状態は、土堤の高まりを構築した砂層とその下に硬く締まった小砂利を伴う層（道として構築されたXVII、XVIII、IX層の上面）が3面確認された。

しかし、道を構築した各面は、土堤状の高まりを構築した時、或いはそれ以前に削り取られたものと思われる。第7図は、土堤状の高まりを掘り下げた図であるが、最上層の道は両側が削り取られ痩せ細った道の幅しか残されていない。これは、第18図の土層堆積図で、VII、VIII、IX層を中心として以下が道を構築した層で、その廻りの土層は削られた状況を示している。また、すぐ南隣（第7図）では、掘削を受けた痕跡が認められる。

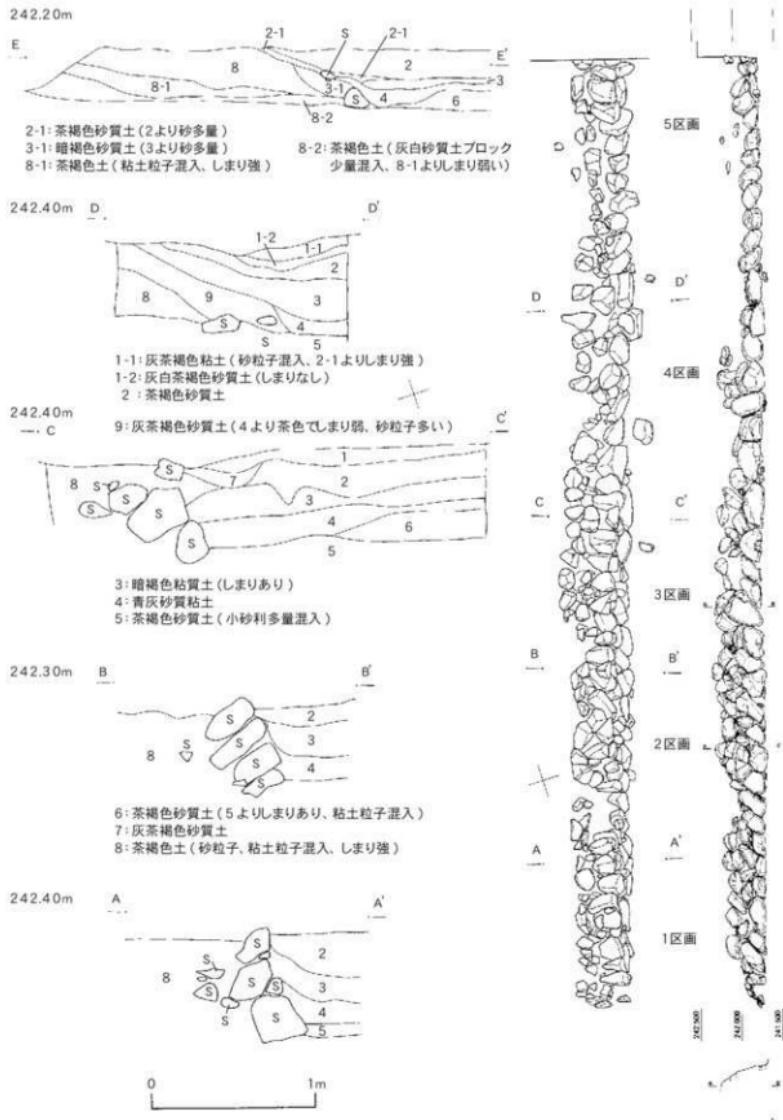
結果として、3面存在していた道の跡は、土堤状の高まりを構築する際に、大幅な攪乱を受け削られたものと思われる。特に最下層にある道については、この面まで攪乱が及んでいたため道の広がりを確認することができなかつた。攪乱の性格および範囲については不明であり、この掘削による攪乱が行われた時期については、明治



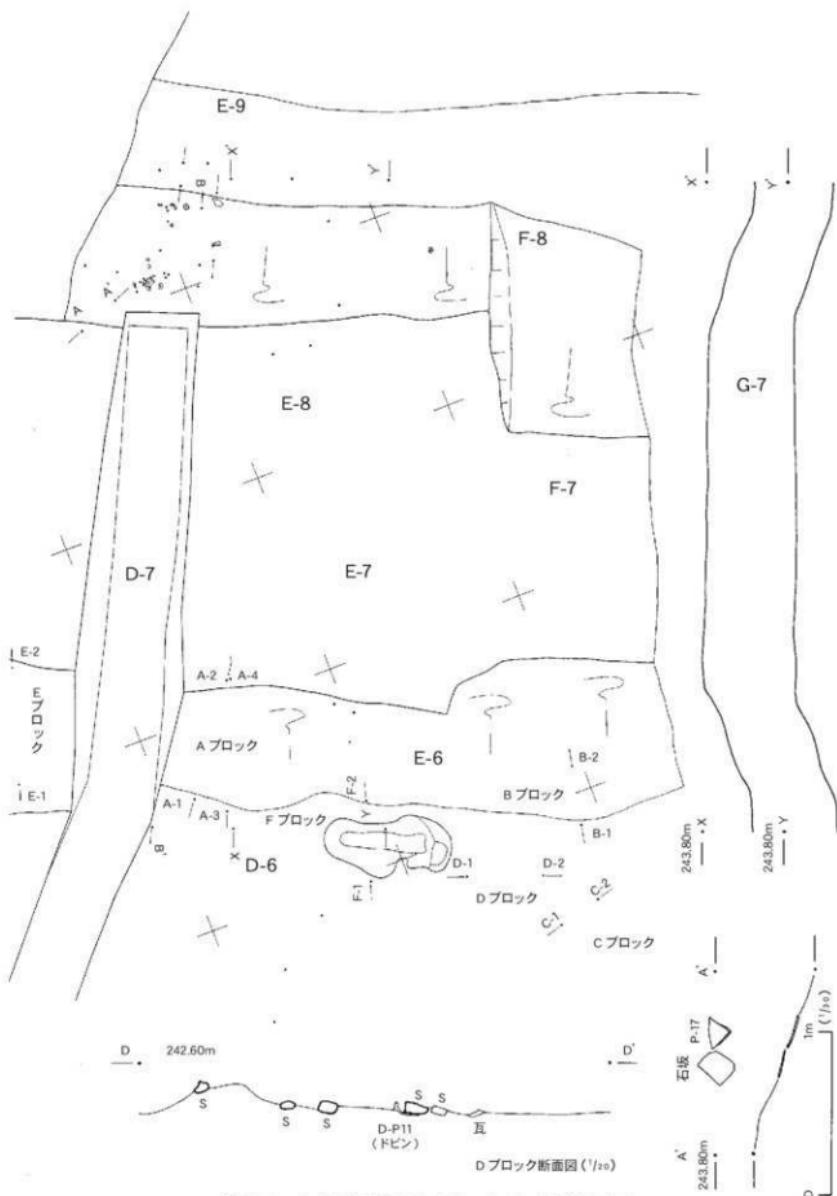
第3図 青柳河岸跡遺構全体図 (1/400) 1~7はトレンチ番号を示す。



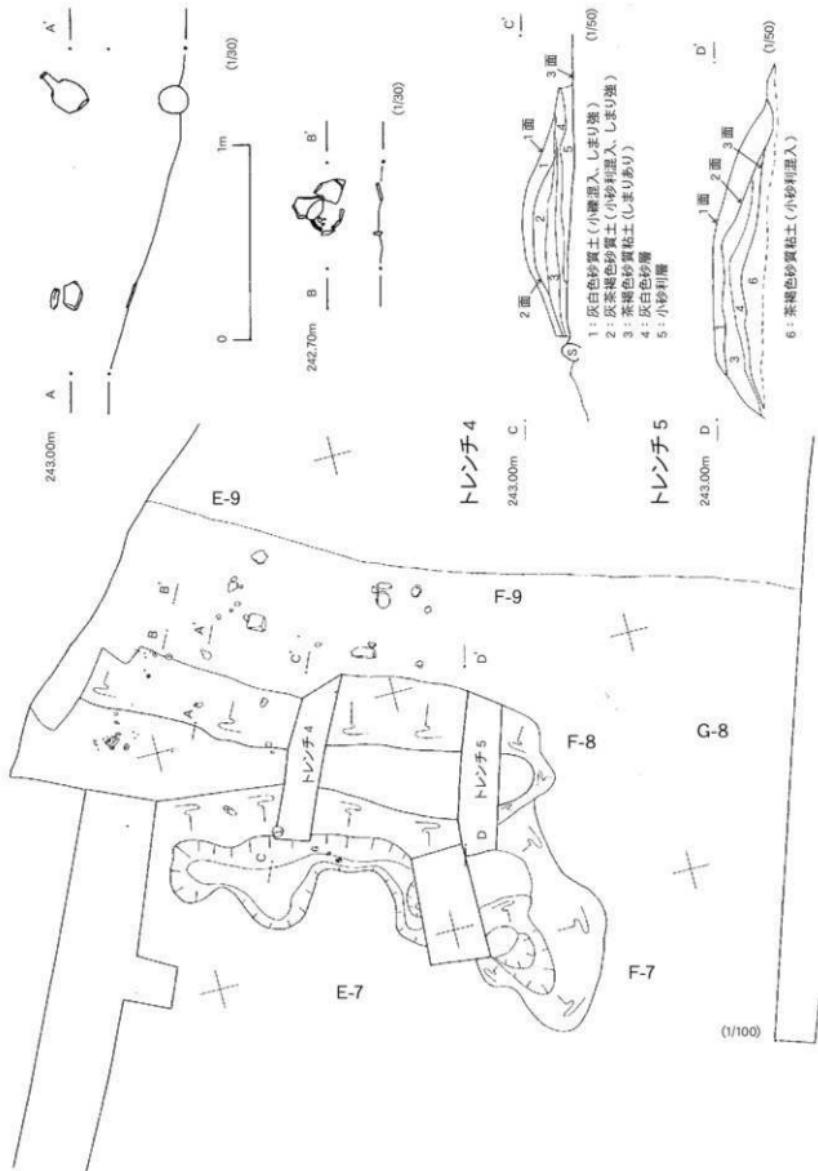
第4図 石垣の全体図 (A~E は土層図のポイント) ( $1/80$ )



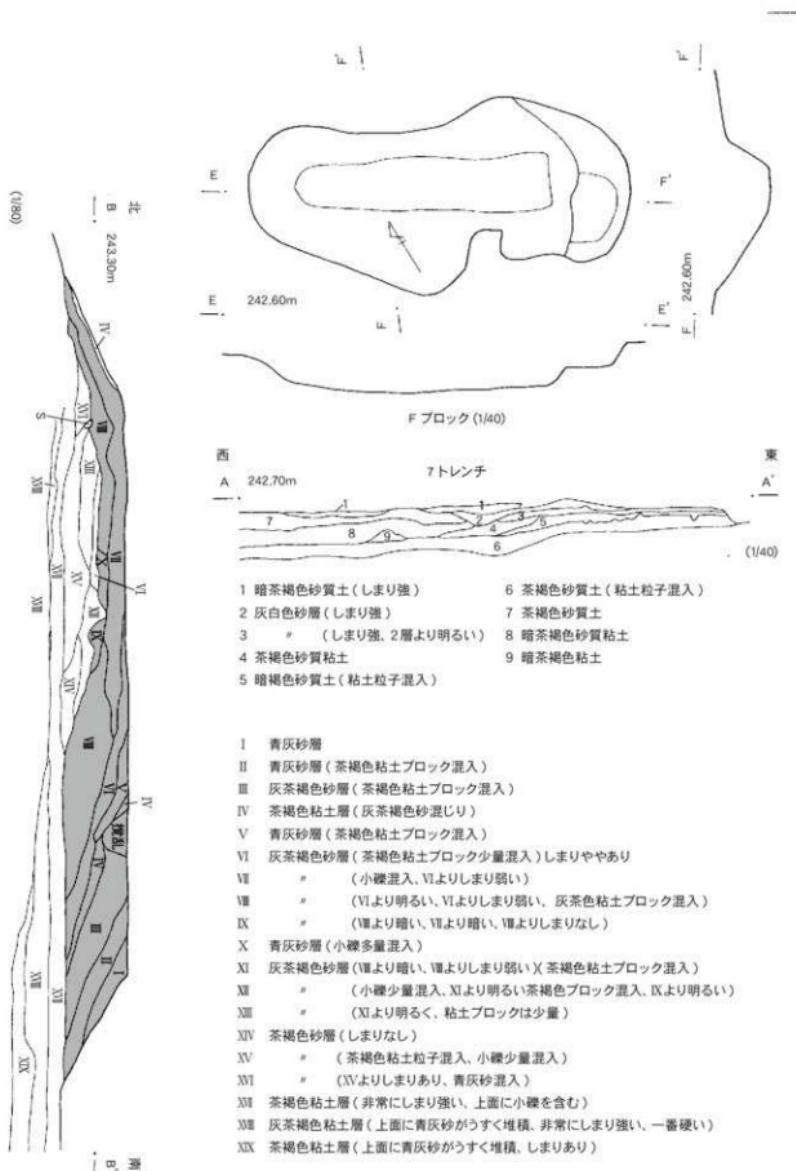
第5図 石垣平面図 ( $1/60$ )・立面図 ( $1/60$ ) および土層図 ( $1/30$ )



第6図 土堤状の高まり ( $1/120$ ) および断面図



第7図 土堤状の高まりの下層の状況図 (1/100)・断面図 (1/100) および土層図 (1/50)



第8図 土堤状の高まり土層図・F ブロック平面・断面図・7トレンチ土層図

36年に会社が解散し、明治38年に秋山源兵衛氏が御米蔵の払い下げを受けて移築された後のことと思われる。

データ 場所：調査区内の北東 位置：C-6, D-9 グリッド～F-6, G-8 グリッド（第3, 6図参照）

標高：243.70m前後 土堤状の長さ：17m前後 土堤状の幅：14.80m前後

土堤状の高さ：1.20m前後

## 第2節 各ブロックの出土品について

### Aブロックについて（第6, 9図、図版4）

第6図Eブロックの東隣ポイントA-1, A-2, A-3, A-4の間にあり南斜面に位置する。

陶磁器類などは、広がりを見せず一方から捨てられ、斜面に沿って流れ落ち込んだ状況が窺える。ガラス瓶類は、少ない。時期を知る手がかりとして、碍子が見つかっている。これらの出土品は、青柳河岸跡に伴うものではないため、記録として写真撮影と標高のみに留めた。よって、下層からの出土品については、写真撮影および標高等の記録は行わなかった。斜面上と下とのレベル差は1.12m前後である。

### Bブロックについて（第6, 10図、図版4）

第6図ポイントB-1, B-2の間にあり、南斜面の裾に近い場所に位置する。陶磁器類、薬瓶、化粧瓶などがある。手前の洗面器は、診療所や病院でよく見かけた白色の鉄製品である。斜面上と下とのレベル差は4.0cm前後である。

### Cブロックについて（第6, 11図、図版4）

第6図ポイントC-1, C-2の間にあり、出土物は平坦な場所に存在する。P-3とP-7は接合し、ほぼ完形となった土瓶（第24図C-P-7）がある。出土物のP-1とP-7の比高差は、21cm前後である。このほか、薬瓶や湯呑などがある。

### Dブロックについて（第6, 12図、図版4）

第6図ポイントD-1, D-2の間にあり、土堤状の斜面を下った平坦な場所に位置する。ここでは、他のブロックと異なり礫が多数存在し、礫のない場所から陶磁器類、石板（P-10）、碍子（P-12）などが点在している。

出土物の鶴徳利（P-9）については、底外面に登録新案48894号が記載されている。出土物の高低差は、わずか8.4cmである。

### Eブロックについて（第6, 13図、図版4）

第6図ポイントE-1, E-2の間にあり、土堤状の高まりを断ち割った西側に位置する。出土物は、斜面に沿って下方へ流れている。このブロックでは、液体を入れた陶器製品（P-52）、ピン類、湯呑、皿などが見つかり、特に商店の宣伝用としてつくられた皿などがある。この皿は、地域を特定できる商店名入りで、「青柳町一力萬屋醸造店」と記載されている。斜面上と下とのレベル差は124cm前後である。

### Fブロックについて（第6, 8図）

第6図ポイントF-1, F-2の間にあり、梢円形に掘削された穴の中に薬瓶、ガラスピンドル、湯呑などが詰め込まれ、明らかに廃棄のために行われたものである。さらに、その穴の中には、ゴムベルトのようなものまで詰められていた。掘削された穴の規模は、長径3.10m、短径1.40m、深さ34cm前後である。

さて、これらの出土物は、土堤状の高まりがつくられてから、ここに運ばれたものと思われることから、この土堤の時期を考える上で好資料となる。そこで、これら出土物の時代を検証し、土堤状に盛られた遺構がいつ頃なのか検討してみたい。

まず、増穂町青柳にある商店の宣伝用の商品であるが、Eブロック出土の徳利（第25図）、皿（第15, 18, 19図）、猪口、茶碗などがあげられる。

増穂町誌p1043醸造業の項に、明治6年頃青柳の井筒屋・井上家では安政頃肥後出身の名力士に「不知火」というのがあり、同力士を畠屋にしていたことからあやかって名付けたという。明治17年6月商標条例および商標登録手続きが布告、その10月1日から施行され、明治27年には「不知火」の商標は登録され、専用権を

得ており、このころから清酒の銘柄が重要視されてきた。(第25図 E-一括2)

明治6年、青柳の萬屋中込家では初め「松が枝」と名付け、大正頃は「一刀正宗」(第15図・図版5E-一括4写真裏面に、青柳町一力萬屋醸造店と記載され、表面には「伊弉諾 正宗」と記載されている。この出土品から「一刀正宗」は「一力正宗」の誤りと思われる。)といい、「楊貴妃」などともいったが昭和4年から雅楽の中から「春鶯囀」を探して現代に至った、ということである。

C-P-17(第20図)は、カルピス製造会社の社名があり、茶色透明の飲料瓶である。大正5年(1916)に三島海雲が乳酸菌飲料の工業化に成功し、醍醐味合資会社を設立して「醍醐味」を発売した。大正8年(1919)には、「カルピス」と改称した。大正9年(1920)には180ml入りの小瓶(ねじり瓶)、大正14年(1925)に新徳用瓶(630ml)、大正15年(1926)に中瓶(330ml)が発売された。(『ガラス瓶の考古学』桜井準也 2006)本瓶の栓は、王冠である。

D-P-9(第24図)は、鴎徳利である。徳利の底には、「登録新案48894号」の登録新案番号がある。

このほかに、乾電池30本が一組となったバッテリーのようなものも見つかった(図版4)。また、碍子(家の中に配線するときに使われた陶器製のもの第23、24、26、27図)なども見つかっている。

碍子については、増穂町で電気が送電され始めるのは、明治40年であるが、増穂町誌史料編によると明治45年青柳村に初めて電燈がつくと記載されている。増穂町への送電については、明治39年に2500戸の芦川第二発電所が建設され、市川大門町と甲府城東地域へ電力の供給区域が拡大されており、第二発電所から供給されたものと思われる。

鰐沢河岸跡(第148集 本文p70)によると、「大学目薬」は明治30年代以降、「ロート目薬」は明治42年以降(第20図)で、特に「山田安民」名(第21図)は大正9年発売のことである。E-P-12(第21図)のサイダービンであるが、大正11年に加富登麦酒、帝国鈴泉、日本製堀の3社が合併し、日本麦酒鈴泉となった(桜井準也『ガラス瓶の考古学』より)。

よって、ここに持ち込まれた時期は早くとも「ロート目薬」から明治42年以降、碍子の存在から明治45年以降、「山田安民」名から大正9年以降、E-P-12のサイダービンが大正11年以降、また、出征のための杯などは昭和16年頃のものと考えられる。

のことから、土堤状の高まりは、昭和16年ころまで使用されていた可能性がある。

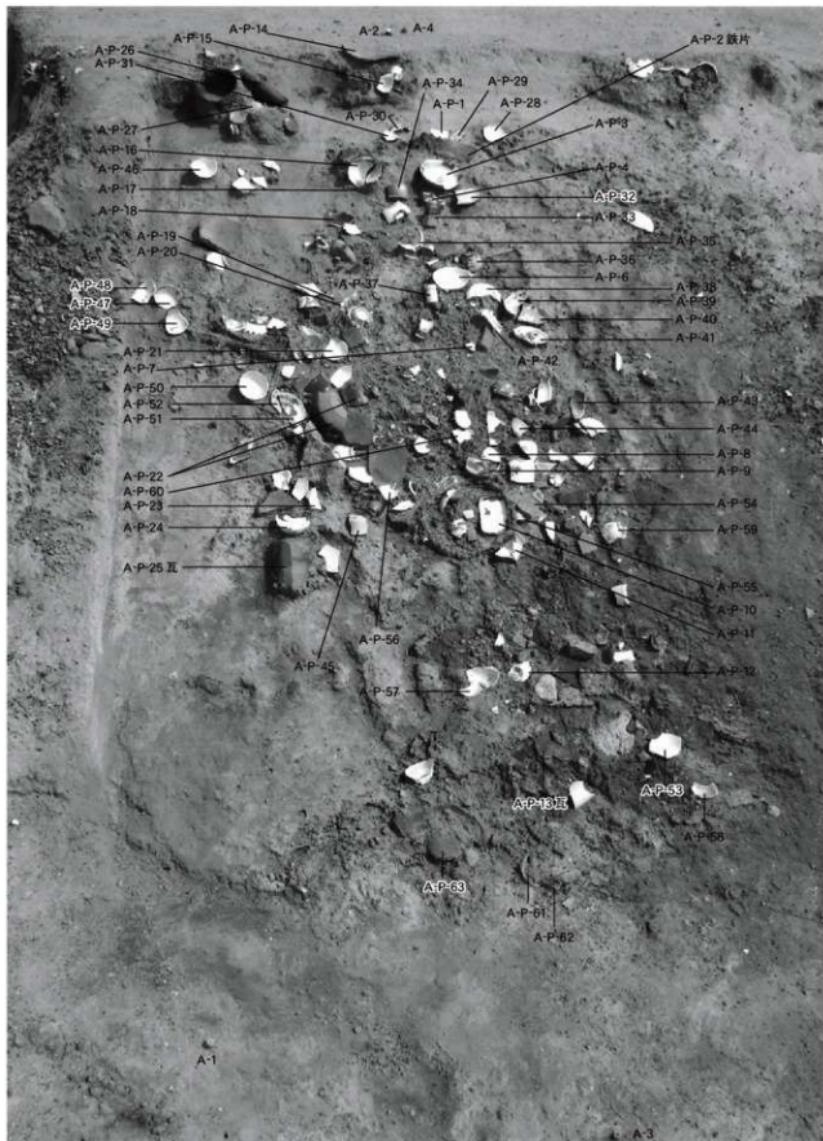
また、薬瓶については、蘆澤(または芦澤)醫院や回春堂醫院、久保内科醫院、横手醫院などもあり、増穂町誌p291 第二節 保険施設の概況 を参照されたい。

## 第4章 まとめ

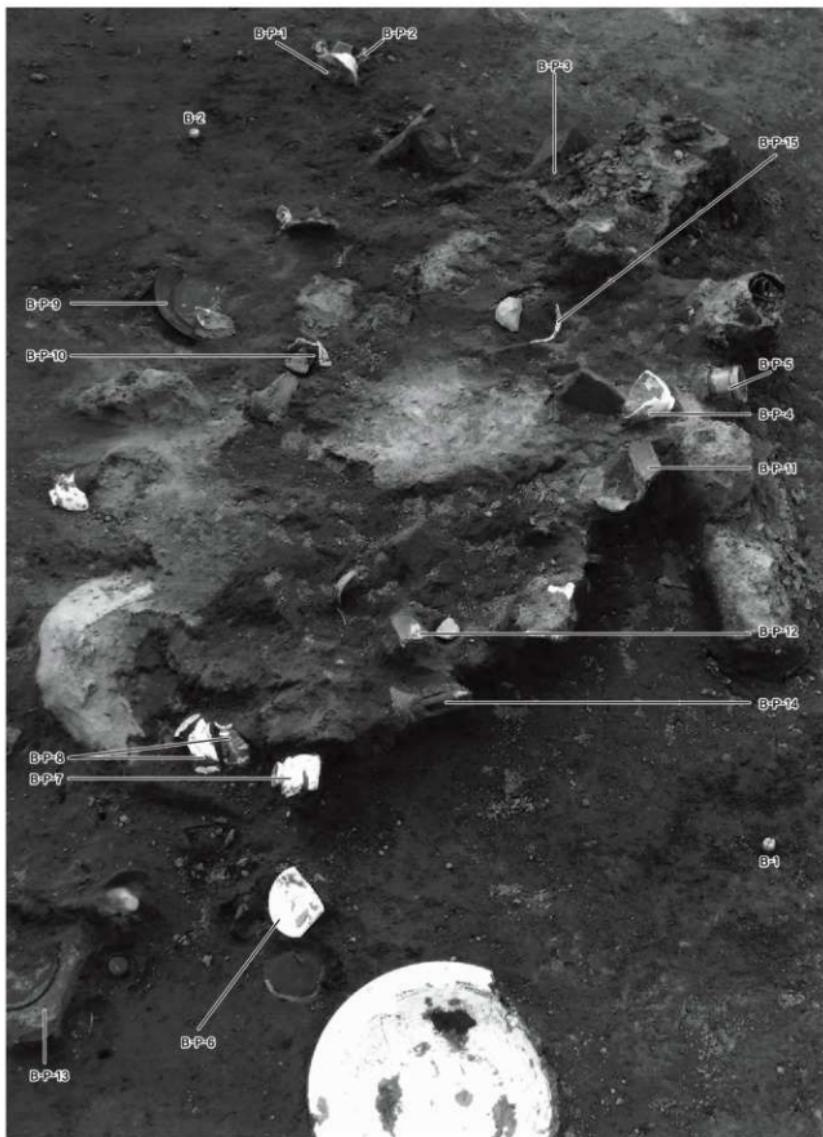
青柳河岸は、大正年間に富士川の土堤が大改修され、川が東に寄せられたため河岸跡は今河川敷となっている。そして平成15年度に実施された試掘調査によりこの河川敷からは、礎石と思われる石が見つかっていることからも明らかである。また、今回の調査区の東側には五明川が流れしており、この川は昭和28年度から内水対策として五明合流調整工に着手し、昭和42年度に完成したものである。

本遺跡では、土堤状の高まり、石垣などが発見されたが、青柳河岸に伴うものではないことも明らかにされた。しかし、土堤状の高まりの下には、「青柳河岸」が繁栄していた頃の道が3面存在していた。

このような結果から、青柳河岸の本体は、中州状となった場所にその存在が明らかとなり、河岸本体から町並みへと続く道も明らかとなった。中州となっているこの場所に青柳河岸跡が存在し、この中州に工事などが行われる際には調査を必要とし、その時ははじめて青柳河岸の全貌が見えてくるのではないかと思われる。



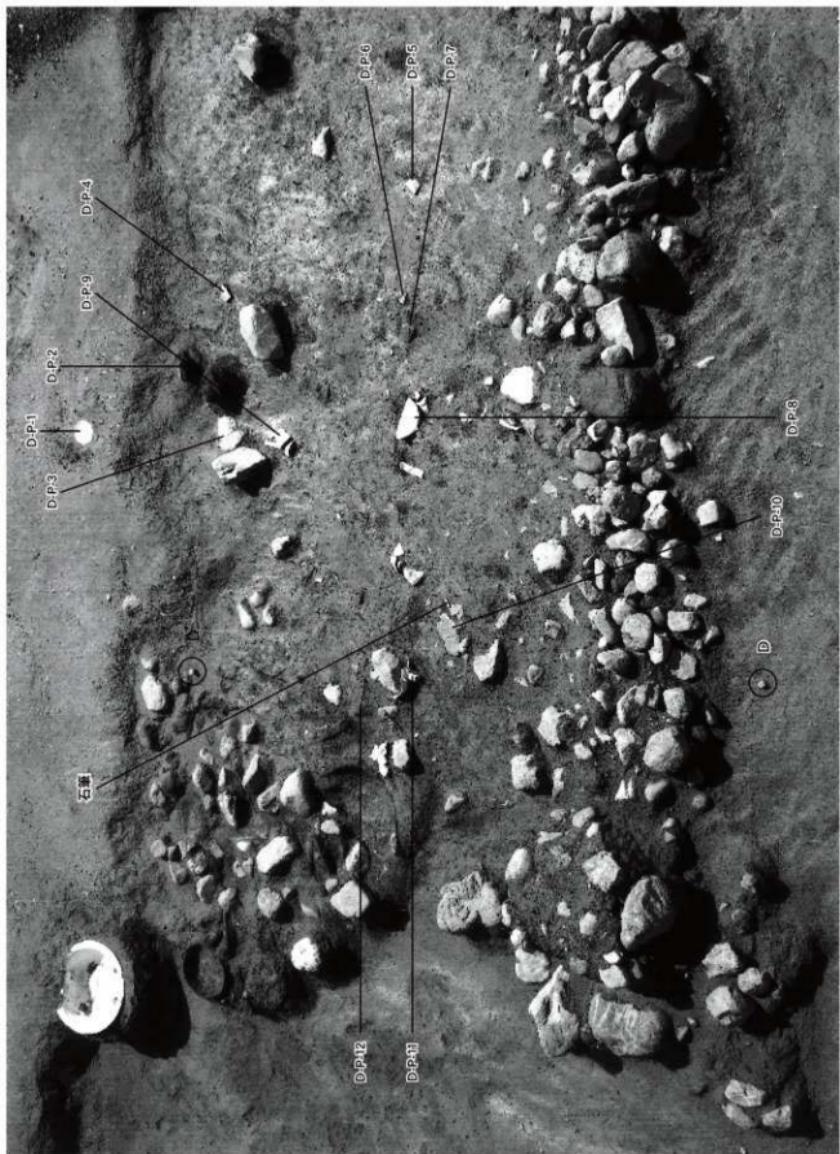
第9図 A ブロック 出土状況



第10図 B ブロック 出土状況



第11図 Cブロック 出土状況



第12図 Dブロック 出土状況



第13図 Eブロック 出土状況

表-1

ブロック	番号	号	A=口徑他	B=底径他	C=高さ他	D=幅/横他	色	形	形	備考	種類	番号
Aブロック	P -	3	13.7	7.6	3.5		蛇の目高台・ほぼり	1/2現存	見込みに青 絵付け	14回		
系綱	P -	6	(11.4)	4.2	4.5					14回		
編	P -	9	-	(8.0)	(1.5)		ういす色			14回		
環	P -	17	16.4	9.3	7.3	18.2	鉄輪	34現存	A-P-22と接合	23回		
ラムネピン	P -	21	7.4	3.0	3.0		乳白色	口縁部は約1/2現存	35現存	14回		
湯呑	P -	26	2.0	5.0	18.9		薄緑色半透明	明治20年に港永硝子工場が国産玉 ラムネ瓶を製造		20回		
茶碗	P -	27	7.6	3.6	4.1					16回		
急須	P -	28	11.4	4.8	5.8					14回		
湯呑	P -	30	-	5.4	6.0	11.4	梅、竹の繪	手描、ほぼり	P-30+P-42+P-57接合	23回		
湯呑	P -	32	(12.0)	(6.9)	1.9		鶴、鶴の絵柄	墨絵、1/4現存		16回		
湯呑	P -	33	5.8	3.8	6.9			1/2現存		14回		
鍋子	P -	36	8.4	3.4	4.1			P-33と胎土が同じ		14回		
皿	P -	37	3.4	3.4	5.0		乳白色	11) 完形		23回		
皿	P -	38	11.0	6.4	2.0		葉(青色)、花(緋色)	錫板缶写	A-P-41と接合	16回		
皿	P -	40	10.4	6.0	2.1		緑色		板と螺	16回		
湯呑	P -	45	8.0	(2.8)	4.2			外面部は板の關刺、1/2現存	端反	14回		
湯呑	P -	46	8.0	3.6	4.7		コリットと薄茶色で絵付け	2/3現存、武士と富士山	高台に「米山」の文字あり	14回		
湯呑	P -	47	8.1	3.8	4.3		菊(コバルトブルー)の絵柄か	鳥の目高台・型紙	口縁部・脚欠損	16回		
湯呑	P -	49	(7.6)	(3.6)	4.5		桺に面された馬の絵柄	約1/2現存	底に「梅月」と文字あり	14回		
皿	P -	52	-	9.0	(4.1)	8.9	ふいす色	蛇の目高台	焼き書きあり	14回		
皿	P -	55	(11.0)	(6.0)	2.2		青色透明	内面に墨の花か	染め付け	16回		
インクpin	P -	62	2.0	4.0	5.2					20回		
蓋	P -	63	25.0	19.4	6.8	7.0	こげ茶色	火消しの蓋か、つまみに陰刻あり	陶器、穴は4カ所か	中巨量	23回	

表-2

Bブロック	番号	号	A=口徑他	B=底径他	C=高さ他	D=幅/横他	色	形	形	備考	種類	番号
カラス容器	P -	5	5.0	5.1	4.1		透明	6角形、完形		20回		
小皿	P -	6	8.3	3.7	1.6		乳白色	1/2現存		23回		
湯呑	P -	8	8.4	3.2	4.8		三重の巻、寒、樹木の絵柄	1/2以上現存		16回		
湯呑	P -	10	(8.1)	3.7	4.8		鳥と樹木	錫版缶写、1/2現存	錫版醫院	20回		
薬ピン	B - 一括	2.2	5.6	14.4			無色透明	組合ひせ200cc		23回		
ガラス薬	B - 一括	2.0	5.2	2.0			青銅色半透明			20回		
小皿	B - 一括	3.0	3.6	1.9			青白色	1/4現存		23回		
ヘチマコロン	B - 一括	1.8	3.8	10.9			緑色半透明	角二八、化粧水瓶	大正4年に発売された	20回		
薬ピン	B - 一括	2.6	3.6	8.3			茶色半透明	丸二八、底に[50]のマークあり		20回		
ガラスコップ	B - 一括	8.2	-	(7.7)			口縁部近付は黒いシグネクタ色	黒く焼、1/2現存		20回		
茶碗	B - 一括	11.4	4.3	5.7			梅の花か	錫版缶写	4区画に絵柄	16回		

表-3

Cブロック	番号	A=口径地	B=底径地	C=錆高地	D=幅/機地色	E=刷	F=被着
急須	P - 2	12.0	7.4	6.5	13.0 黒/茶色	把手欠損	陶器 P-7a - 活が接合
蓋	P - 3	8.4	6.0	2.7	1.8	人物2人(墨)	陶器 P-7a - 活が接合
圓	P - 4	11.0	6.5	2.3	5.9	3/4現存	銅板転写、1/2現存
茶碗	P - 5	11.0	3.2	5.9	5.9	丸ビズ・完形	P-10a - 活
薬ビン	P - 6	2.7	7.0	20.0	内径1.4	茶黃色透明	陶器、P-3 + 活が接合
土瓶	P - 7	7.8	7.8	9.8	16.0	缶の詰柄	陶器 P-3 + P-7が接合
蓋	P - 8	8.4	6.0	2.7	1.8	花の詰柄	P-10a-P-13が接合
鉢	P - 8	17.6	8.5	6.2	6.2	口縁部波状、浅い蛇の目高台	磁器
湯呑	P - 9	8.4	3.1	5.0	5.0	外面は青色で金付け	元形
おろし器	P - 11	8.6	13.1	0.6	0.6	裏白色	「あしひきの やまとりのおの...」
皿	P - 12	11.1	6.6	2.2	2.2	赤絵、百人一首	銅板転写、完形
土瓶	P - 14	(8. 0)	8.3	10.7	16.2	はげ光形	はげ光形
茶碗	P - 15	11.0	4.0	6.0	6.0	吹き引け、白雲の富士山	はげ光形
小鉢	P - 16	11.4	5.2	5.3	5.3	茶色半透明 金・黒・松・竹の詰柄	丸ビズ・完形
カルビス	P - 17	11.4	3.7	14.0	3.0/1.8	コバルブルー	カルビス製造会社、松は玉冠
薬ビン	P - 19	-	2.6	(6.1)	10.6	無色透明	神楽松の露、 ニッキ水瓶か
ガラスピン	P - 20	内) 1.0/1.6	2.4	10.6	4.0/2.4	無色透明	漆喰屋
薬ビン	C - -活1	1.6	3.7	8.0	4.0/2.2	無色透明	精円形、完形、C-5-c-2
薬ビン	C - -活2	1.6	3.8	7.8	4.0/2.2	無色透明	精円形、完形、C-5-c-2
薬ビン	C - -活3	1.8	4.1	9.4	4.6/3.2	無色透明	精円形、完形、C-5-c-3
ガラスピン	C - -活4	(1.3)	1.7	(9.3)	2.5	濃茶色透明	口縁部欠損、型合わせ、底四角
製削り	C - -活5	9.2	3.7	0.1	透かし彫り	ニッキ水瓶か	
蓋	C - -活6	6.8	5.0	2.1	1.9	茶黄色	陶器
蓋	C - -活7	6.8	4.4	2.2	1.3	濃茶/茶色	陶器
湯呑	C - -活8	8.2	3.2	4.8	4.8	外側面に墨色の繪柄	1/2現存
湯呑	C - -活9	7.9	3.7	4.7	3.9	花の詰柄(ビンク・黒)	4/5現存
湯呑	C - -活10	6.1	3.9	6.6	—	花の詰柄	底に文字あり

表-4

Dブロック	番号	A=口径地	B=底径地	C=錆高地	D=幅/機地色	E=刷	F=被着
茶碗	P - 3	11.8	(4.3)	5.1	5.1	高士山の絵柄	馬を引く人、小屋、杉など
茶碗	P - 8	12.0	4.1	5.2	5.0	富士山の絵柄	銅板転写、P-8と同一の絵柄
煎茶利	P - 9	—	(11.1)	5.0	0.4	乳白色	底に登録新案48894号あり
石板	P - 10	(6.2)	(11.5)	0.4	—	粘板器	石製品
土瓶	P - 11	(6.0)	6.2	8.1	13.4	—	陶器
錦子(天井)	P - 12	7.0	5.2	2.0	乳白色	1/2現存	磁器
石筆	D - -活1	—	(2.9)	—	0.5	—	石製品

## 表一五

E=プロック	番号	A=口徑他	B=底径他	C=體高他	D=幅/横他	色	備考
湯呑	P - 3	8.0	3.7	4.6	11.2	外面に裏つぼの絵付け	はぼ光形
魚	P - 6	10.7	6.8	6.0	5.7	鉢	陶器
ダイヤモンド	P - 7	2.0	5.7	27.0	5.9	茶色半透明	指手火燭
ピン	P - 8	2.5	5.9	23.7	5.8	緑色半透明	3ヒナジヨウ 東京石川連運
ピン	P - 9	2.0	5.8	25.0	3.1	緑色半透明	花瓶、サイダー瓶
ピンの栓	P - 9	16.0	13.2	4.6	6.0	乳白色	ワイン瓶か
皿の蓋	P - 11	20.8	13.8	2.7	2.7	鉢	機械会
皿	P - 12	1.8	6.0	24.4	2.1	絵付けあり、青	手形
サイダー瓶	P - 13	7.8	6.0	2.1	2.0	緑色半透明	大明〇七年製
皿	P - 14	8.4	3.2	7.7	3.0	茶色	底に5コの目録 サイダー瓶、三矢のマーク
皿	P - 16	7.8	13.5	2.4	2.2	金形	陶器
硯	P - 17	6.5	13.9	13.9	13.9	金形	4.4
茶碗	P - 20	10.8	4.2	5.8	5.8	金形	4.4
皿	P - 21	15.0	9.0	4.6	4.6	金形	4.4
湯呑	P - 25	5.2	4.1	6.1	6.1	金形	4.4
蓋	P - 28	7.0	5.8	2.6	1.4	金形	4.4
蓋	P - 31	7.2	6.2	2.3	1.4	金形	4.4
蓋	P - 33	10.3	3.6	4.2	4.2	金形	4.4
湯呑	P - 37	7.8	3.6	4.8	4.8	金形	4.4
湯呑	P - 40	8.5	3.7	4.7	4.7	多くの人物	4.4
皿	P - 41	10.5	6.3	3.2	3.2	金形	4.4
灯明皿	P - 42	9.4	1.9	4.2	4.2	青茶色	銅板瓦写
蓋	P - 44	7.0	-	(2.0)	-	青茶色	はぼ光形
ガラスピン	P - 45	6.4	4.6	2.7	1.3	青茶色透明	つまみ欠損
ピンの栓	P - 46	2.4	4.3	19.3	3.1	青茶色透明	元形
湯呑	P - 47	7.9	3.6	4.6	2.1	漆緑色 46 の栓ではない 富士山・松竹梅	ねじりかか 乾の目・銅板軸写
酒杯	P - 48	7.6	2.8	3.1	3.1	透明	内面に「〇命」、外面「」 あり
回春堂	P - 49	2.2	6.0	13.8	10.3	透明	回春堂醫院
鉢	P - 51	20.8	6.0	6.9	(23.0)	鉢	透明
皿	P - 52	9.5	-	2.6	32.0	茶色	漆体を入れる容器
猪口	E - 一括1	(5.5)	-	2.2	2.6	茶色	模様、赤(蟹か)で縁付け
巻利	E - 一括2	-	外・6.0、内・5.6 (14.2)	7.0	7.0	茶色	外正面に秋川酒店があり 井筒屋・井上家
深鉢	E - 一括3	15.0	4.3	9.4	1.8	茶色	14.2
皿	E - 一括4	(19.0)	4.3	9.4	1.6	茶色	14.2
灯明皿	E - 一括5	8.6	3.0	9.4	1.6	茶色	内面に青柳園一力萬屋醤油酒店 約3/4現存
小皿	E - 一括6	8.4	2.4	9.4	1.6	乳白色	25.0

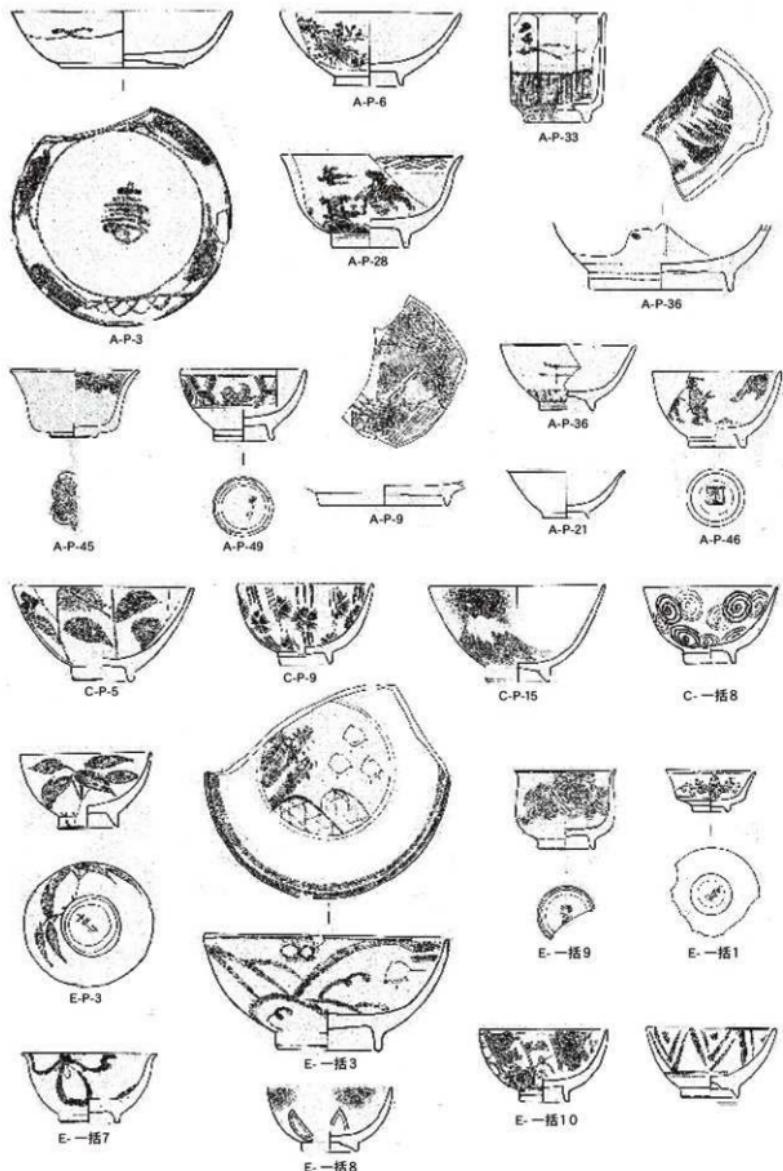
端反	14回
外画面に文字あり	14回
外画面に文字あり	14回
外画面に文字あり	14回
うくいす色	14回
コバルトルビー	25回
把手欠損、手描き	25回
竹・梅の繪柄 同心円の繪柄	25回
竹・梅の繪柄 同心円の繪柄	25回
約34現存	25回
久保内日本医院	21回
瀧澤医院(日字体の瀧澤)	21回
ひょくうたん形	20回
ペタソコでしゃうたん形	20回
本浦山田安樂、ロート目薬	20回
YENの鳥刺あり	20回
丸ビン、底に開口あり	20回
化粧水ビン	20回
ヘチマコロン	21回
MEAT JUICE	21回
薬か、お薬入れの薬か	20回
AKADAMA PORT WINE	21回
赤玉ボトワイン	29回
石製品	26回
-	26回
底には糸切り痕あり	25回
上面にひょうたん形の跡刻	25回
火消し蓋のつまみか	25回
中央に三番穴	17回
端反	17回
把手の一節欠損、歯II第2番	17回
P-197	17回
口縫部欠損	17回
蓋を欠損	17回
口縫部内面に戻	18回
型紙、蛇の目	18回
型紙、蛇の目	18回
青刷・秋山文字有り	18回
型紙、蛇の目	18回
銅版画、ぼや形	18回
銅版画、ぼや形	18回
はぼは形	14回
蛇の目萬台、はぼは形	14回
蛇の目萬台、はぼは形	14回
3.6	4.4
3.6	4.1
5.0	4.5
3.6	4.3
6.0	6.0
7.8	7.8
6.4	3.4
8.0	3.2
7.8	3.6
6.0	4.3
6.2	4.3
7.9	2.9
6.9	2.4
8.0	1.4
8.0	1.2
9.0	2.0
7.1	2.0
2.3	14.6
1.4	5.7
3.3	7.9
1.4	6.6
1.7	6.6
1.0	5.3
1.3	10.9
1.6	8.3
2.5	2.7
3.0	8.4
1.6	10.9
-	-
3.0	3.5
11.5	7.3
2.1	28.8
5.5	6.9
3.0	12.4
-	-
-	4.6
-	-
-	-
11.8	-
-	-
(11.5)	6.6
-	4.6
2.0	0.6
3.8	4.0
4.0	4.0
4.3	4.2
2.0	3.2
8.0	8.6
10.3	3.1
20.1	3.5
(15.6)	3.9
9.1	4.2
(15.6)	6.4
(15.4)	7.1
13.2	3.5
13.2	2.4
13.2	6.7
13.2	2.4

	F - 一括 47	(14.9)	8.3	4.0	松竹梅 コバルトフレー	型紙 紙の目	扇形・精円形の複数あり	18回
	E - 一括 48	(14.2)	7.3	2.5	松竹梅 コバルトフレー	型紙	扇形・精円形内に絵柄	18回
	E - 一括 49	13.0	7.5	2.2	金の絵柄	見込み文字あり	見込み文字あり	19回
	E - 一括 50	15.9	9.4	3.2	銅板伝写 先形	銅板伝写	先形	19回
茶碗	E - 一括 51	(11.5)	4.9	5	秋山酒造 正宗	銅板伝写	正宗用	19回
	E - 一括 52	12.8	7.2	2.2	五井の花柄	銅板伝写	区画内に入物	19回
表-6								
Fブロック	番号	A=口溝地	B=底溝地	C=器高地	D=幅/横地	色	備考	
湯呑	F - 一括 1	7.8	3.2	4.4	黒と墨の絵柄か	形の目、1/2現存	外側に精円形の隠刻あり	15回
茶碗	F - 一括 2	11.4	4.7	5.8	鉄砲	完全	底反	15回
茶碗	F - 一括 3	-	-	10.8	丸形、九番、底にMのマークあり	1/4現存、口縁部は三段	底部の中心は丸くへこむ	26回
インクビン	F - 一括 4	2.4	5.0	6.3	透明	丸形、九番、底にMのマークあり	丸形、九番	21回
ビン	F - 一括 5	2.0	2.8	6.8	透明	精円形、レーフード	化粧水瓶、底にマークあり	21回
ビン	F - 一括 6	1.8	4.8	11.0	透明	八角形、本舗山田安民	ローポー目録(昭和 42)に発売さ れ。25	21回
小ビン	F - 一括 7	1.1	2.5	5.8	コバルトフレー	1/3現存	彫りの量	26回
蓋	F - 一括 8	12.6	-	3.1	16.0	ほほ芋形	ほほ芋形	15回
蓋	F - 一括 9	9.8	-	3.0	4.0	銅板伝写	銅板伝写	15回
茶碗	F - 一括 10	6.1	3.5	8.0	黒の絵柄	湯呑	湯呑墨は日字字体	21回
ビン	F - 一括 11	1.4	3.5	8.0	透明	湯呑	底部に「松泉」の文字あり	21回
湯呑	F - 一括 12	7.8	3.8	4.8	相の絵柄	1/2現存	底部に「松泉」の文字あり	21回
灯明皿	F - 一括 13	9.6	4.2	2.2	灰色	ほほ芋形	ほほ芋形	26回
小ビン	F - 一括 14	1.8	3.0	2.7	透明	円形、口は圓にある	14.2と形状が同じ	22回
小ビン	F - 一括 14-2	1.8	3.0	1.8	透明	円形、口は圓にある	14.1と形状が同じ	22回
小ビン	F - 一括 14-3	1.5	2.6	2.8	透明	円形、口は中央にある	胸部分が角張る	22回
小ビン	F - 一括 14-4	1.7	2.0	3.2	透明	円形、口は中央にある	胸部分が円形	22回
鉢	F - 一括 15	34.0/37.4	(17.0)	(25.0)	緑の釉	涅ね鉢	涅ね鉢	27回
ビン	F - 一括 16	1.4	2.3	7.1	透明	丸形、外用コリザ	薬瓶	21回
ビン	F - 一括 17	1.0	2.0	8.2	緑色半透明	六角形、薬瓶ハルナ	薬瓶	22回
ビン	F - 一括 18	2.1	4.8	11.0	透明	精円形、芦薙医院	湯呑墨は日字字体	22回
ビン	F - 一括 19	1.8	2.5	6.6	コバルトフレー	四角、ワカツギ	薬瓶	22回
湯呑	F - 一括 20	8.0	3.0	4.2	手描き、見込みは次き付け	蛇の目	2/3現存	15回
小ビン	F - 一括 21	0.9	2.6	6.0	透明	丸形、目盛りあり	田田コロダイシ、頭角、腹痛	22回
小ビン	F - 一括 22	1.5	2.4	6.8	コバルトフレー	精円形、東京玉露専賣	薬か	22回
ビン	F - 一括 23	2.3	6.0	19.6	茶色半透明	八角形、BLUTOS	底に2 0あり	22回
ビン	F - 一括 24	1.4	2.8	12.7	緑色半透明	八角形、首の長い瓶	22回	22回
ビン	F - 一括 25	2.2	5.8	13.4	6.4	精円形、横手医院	精円形、横手医院	22回
ビン	F - 一括 26	2.5	4.0	7.7	コバルトフレー	丸形、底にT F	大日本製薬か	22回
ビン	F - 一括 27	2.2	3.4	8.0	茶色半透明	丸形、底にP	ウラジマ印 托本	22回
ビン	F - 一括 28	2.1	2.9	6.9	透明	緑色半透明	完形	22回
ビン	F - 一括 29	3.3	5.6	16.5				

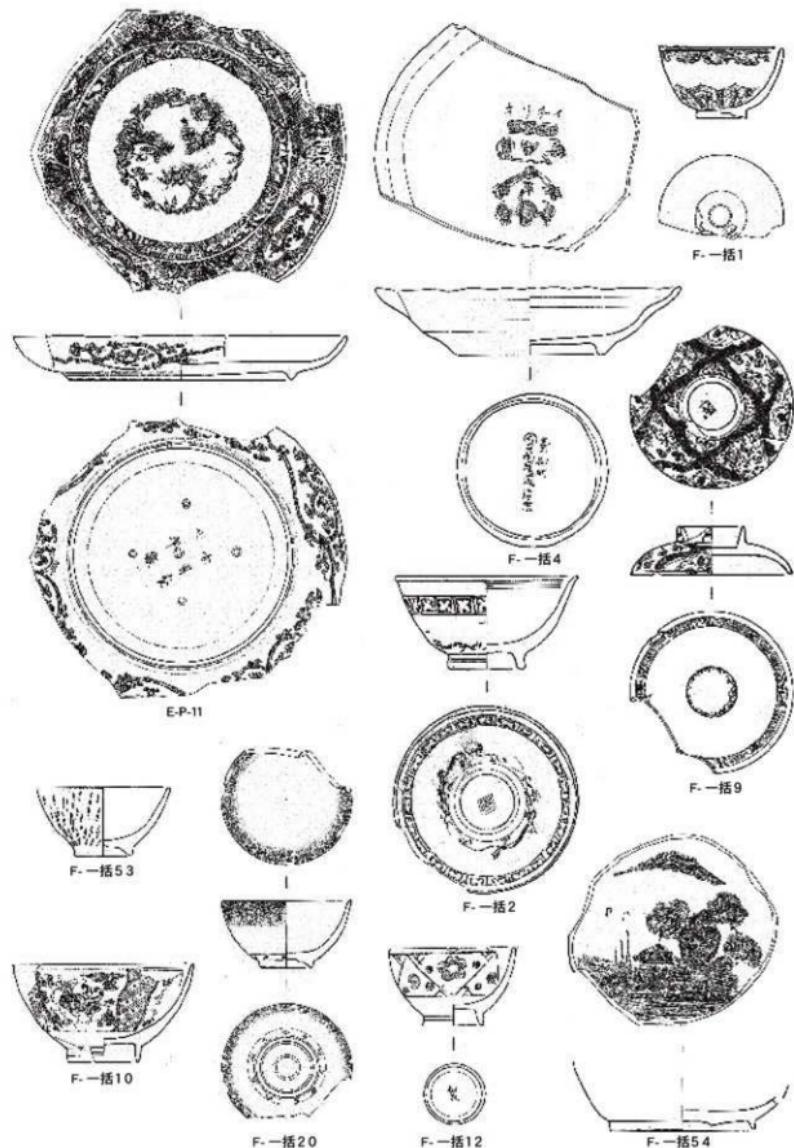
ガラス栓 カラス栓	F.-一括 30	6.6	4.0	4.5	半透明	円筒形	D=幅/横径	C=高さ/直径	22回
小鉢 蓋	F.-一括 32	10.5	5.6	5.2	茶色	円筒形	口縁部一部欠損	22回	
蓋	F.-一括 33	10.8	-	(2.6)	14.0	つまみ部に針金が巻かれている	26回		
ビン	F.-一括 34	18.0	-	4.7	18.2	四角、底にナムライ	26回		
栓 蓋	F.-一括 35	2.6	4.1	4.8	透明	2.2回			
栓	F.-一括 36	1.0	-	2.0	乳白色	機械栓	26回		
ビン	F.-一括 37	1.5	-	3.2	乳白色	機械栓	26回		
栓 蓋	F.-一括 38	5.0	-	6.5	透明	形状から栓としたが、粉あり	22回		
ビン	F.-一括 39	5.8	-	2.6	茶色半透明	円形、中空洞	22回		
栓 蓋	F.-一括 40	1.8	3.8	4.4	透明	円形	外用ヨージ水	2.2回	
ビン	F.-一括 41	2.6	-	9.1	透明	四角、玉置薬局謹製	2.3回		
ビン	F.-一括 42	2.0	4.0	4.4	緑色半透明	丸形、底にT. F.	2.2回		
ビン	F.-一括 43	2.0	-	9.3	緑色半透明	四角	2.2回		
ビン	F.-一括 44	2.1	-	12.5	透明	BLANC DE LAIT 四角	化粧水瓶、明治39年発売	2.2回	
ビン	F.-一括 45	1.8	3.2	5.6	緑色半透明	別府温泉株式会社、登録商標	王冠栓 サイダー瓶	2.2回	
ビン	F.-一括 46	2.4	-	7.9	透明	四角、底にY	2.2回		
ビン	F.-一括 47	1.7	-	12.1	八角形	底に平尾	2.3回		
小皿	F.-一括 48	(11.6)	3.2	8.8	八角形、BLUTOSE	底にT. Fあり	2.2回		
小皿	F.-一括 49	8.6	4.0	2.2	茶色半透明	1/3現存	2.2回		
灯明明皿	F.-一括 50	11.6	-	3.0	透明	1/2現存	2.6回		
灯明明皿	F.-一括 51	8.4	4.0	2.2	透明	ほぼ1/1現存	2.7回		
スリ	F.-一括 52	4.3	-	2.0	透明	茶形	使用頻度少ないと	2.7回	
湯呑	F.-一括 53	8	3.5	4.2	うでいす色	小型の兜形	兜形	2.6回	
皿	F.-一括 54	(13.6)	9.0	4.2	透明	手描き	15回		
碟子	F.-一括 55	2.2	3.0	5.0	透明	元形	2.6回		
茶碗	F.-一括 56	11.1	4.1	5.3	柄の絵柄	型紙・口縁部2/3現存	19回		
深鉢	F.-一括 57	14.5	6.4	6.2	コバレーブルー	口縁部約1/2現存	19回		
皿	F.-一括 58	(17.2)	(9.5)	2.6	日の丸の絵柄	型紙・1/2現存・底部は蛇の目	19回		
皿	F.-一括 59	(15.1)	(8.4)	4.2	風の絵柄	型紙・底部に文字	19回		
幸利	F.-一括 60	-	5.5	-	6.1	底部欠損	19回		
茶碗	D-9G-P-8	(10.2)	4.0	5.0	鉢輪	内面に松葉の絵	16回		

表-7

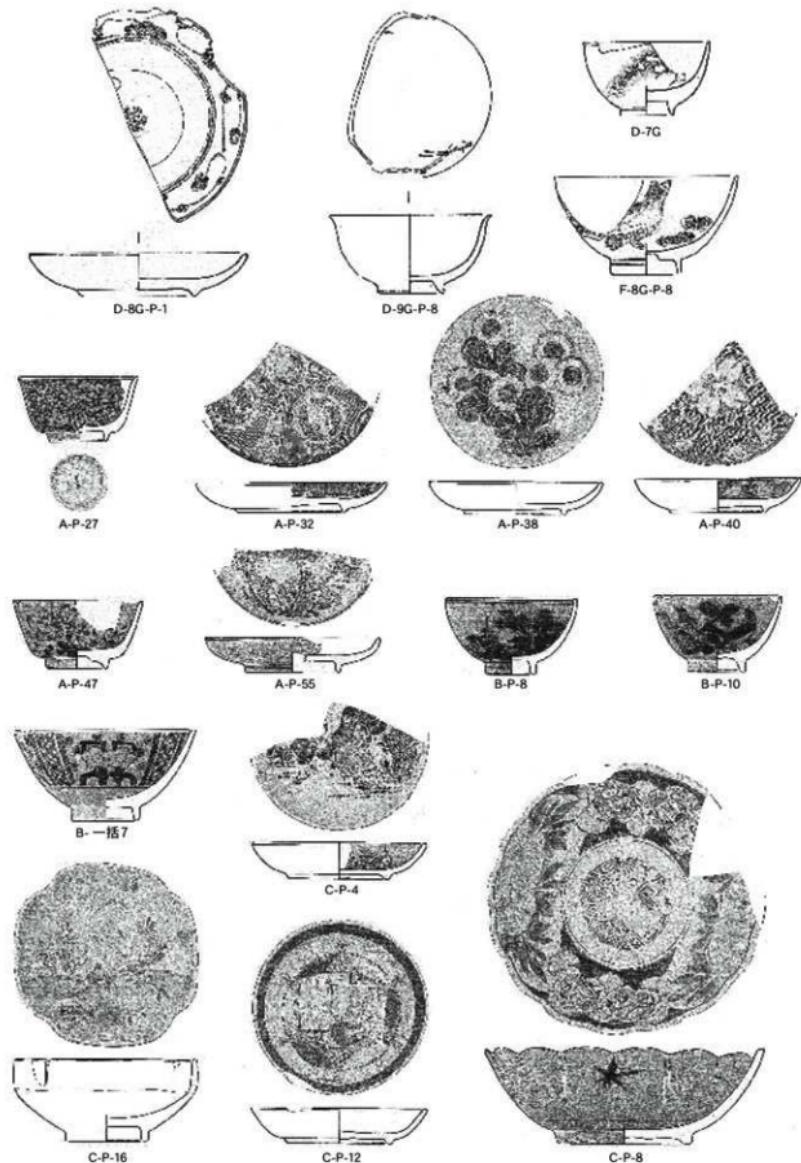
湯呑 鍋の蓋	D-7G (7.8)	[7.3]	4.6	外腹吹き寄せ付		16回
瓦	D-7G (13.4)	-	4.1		平直	27回
瓦	D-8G-W-f (16.3)	25.5	1.5		平直	28回
錫子	D-6G (7.2)	-	1.4	1.9		27回
ビン	E-5G-一括-1 ビン	1.8	3.6	6.0	茶色 丸形	23回
ビン	E-5G-一括-2 ビン	2.2	3.6	6.1	2.4 丸形	23回
瓶石	E-7G E-8G	2.5 1.5	7.3 2.8	1.2 6.0	コヨリルトアールー 透明	29回 23回
ビン	E-9G-G-1 蓋	(2.4)	3.4	14.3	丸形、牛乳瓶5つ入	機械栓 裏に秋山のマークあり
蓋	E-9G-P-8 ビン	5.8	5.6	1.3	1.6 透明	27回 23回
ビン	E-9G-P-9 泡利	2.2	4.6	14.7	5.3 丸形	底部一部欠損 27回
桶木鉢	E-9G-P-11 瓶石	4.2	8.0	26.2		28回
桶木鉢	E-9G-P-12 F-7G-一括	21.4	17.4	20.0		29回
茶碗	F-9G-C-P-8 すり鉢	3.0	5.7	3.0	盤の絵柄	16回
茶碗	G-13G-P-8 すり鉢	11.4	4.4	8.2	口縁部34現存・数の目	27回
強の底	G-13G-P-6 H-13G-P-12	-	-	-	石垣周辺	27回
小型の蓋	H-13G-P-3 寛永通宝	14.6	(15.0)	(4.8)	H-13G-P-2と接合 口縁部のみ	28回
寛永通宝	G-8G-C-1 F-5G-C-1	-	-		石列5区と接合	27回
寛永通宝	F-5G-C-2 明治一錢					29回
寛永通宝	F-5G-C-3 E-6G-C-1					29回
明治一錢						29回



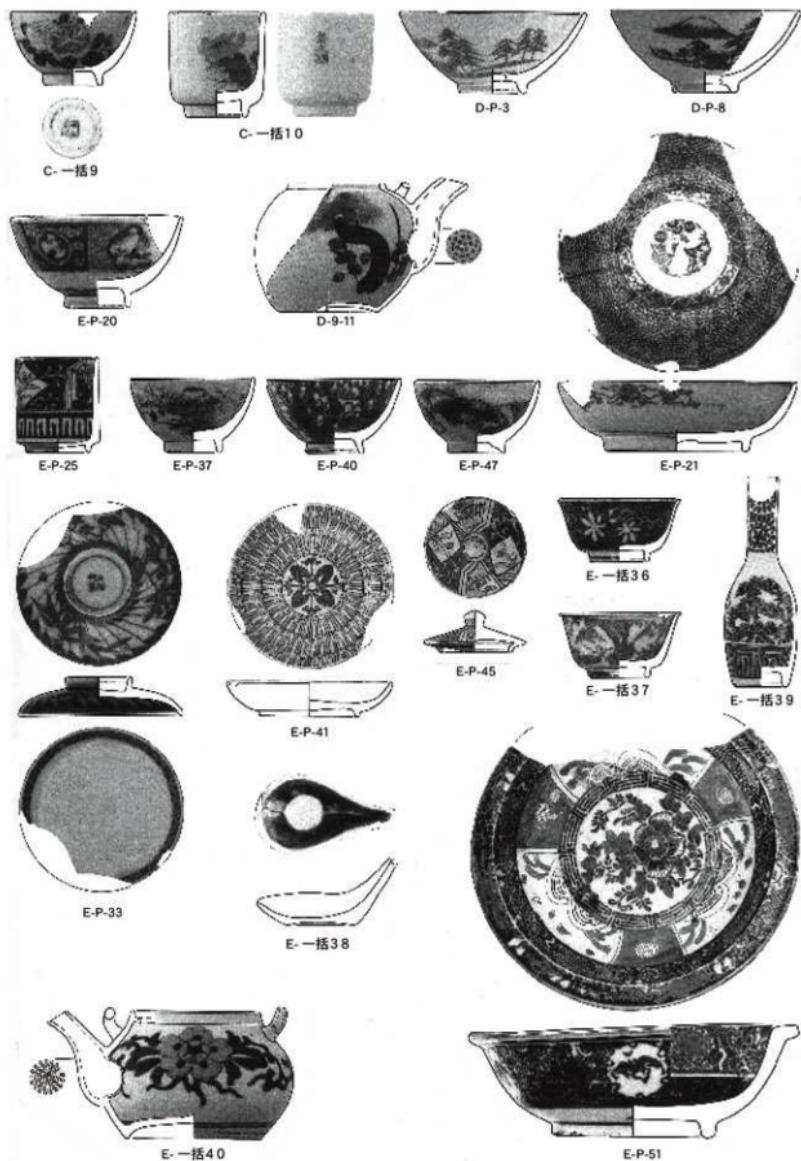
第14図 磁器（1）（ $\frac{1}{3}$ ）



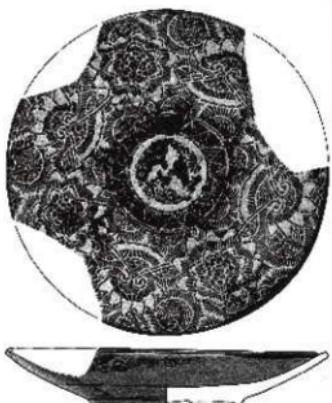
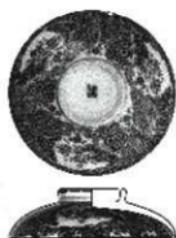
第15図 磁器（2）（ $\frac{1}{3}$ ）



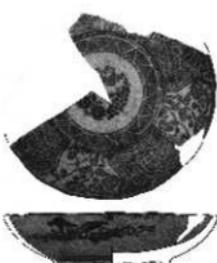
第16図 磁器（3）（ $\frac{1}{3}$ ）



第17図 磁器 (4) (1/3)



E-一括44



E-一括45



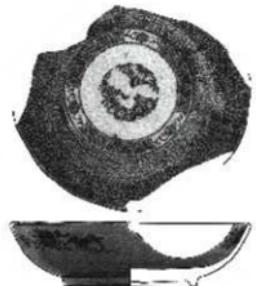
E-一括46



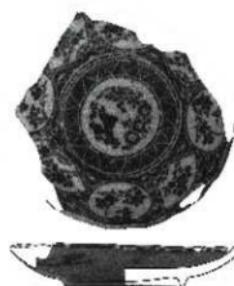
E-一括42



E-一括43



E-一括47



E-一括48

第18図 磁器(5) (1/3)



E-一括49



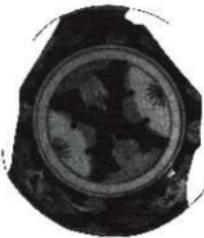
E-一括52



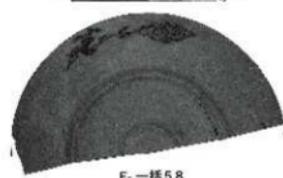
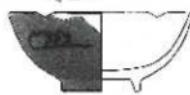
E-一括50



F-一括56



E-一括51



F-一括58

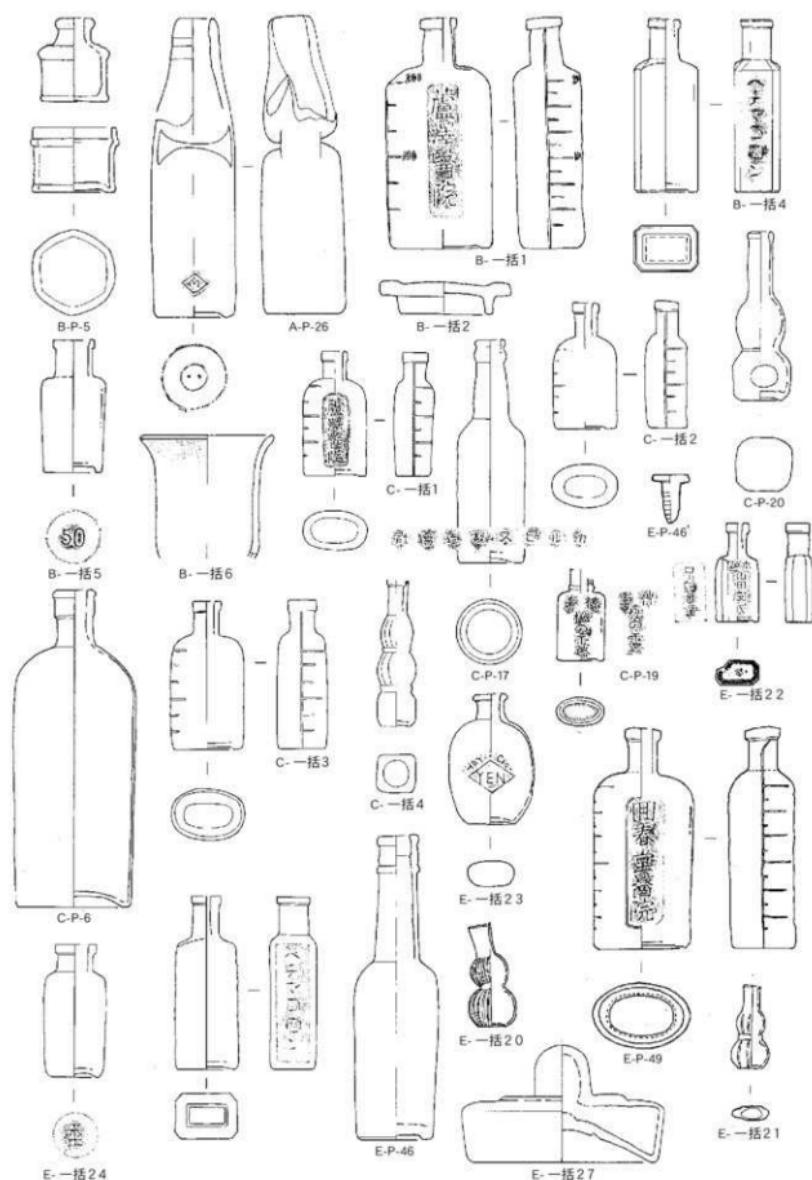


F-一括59

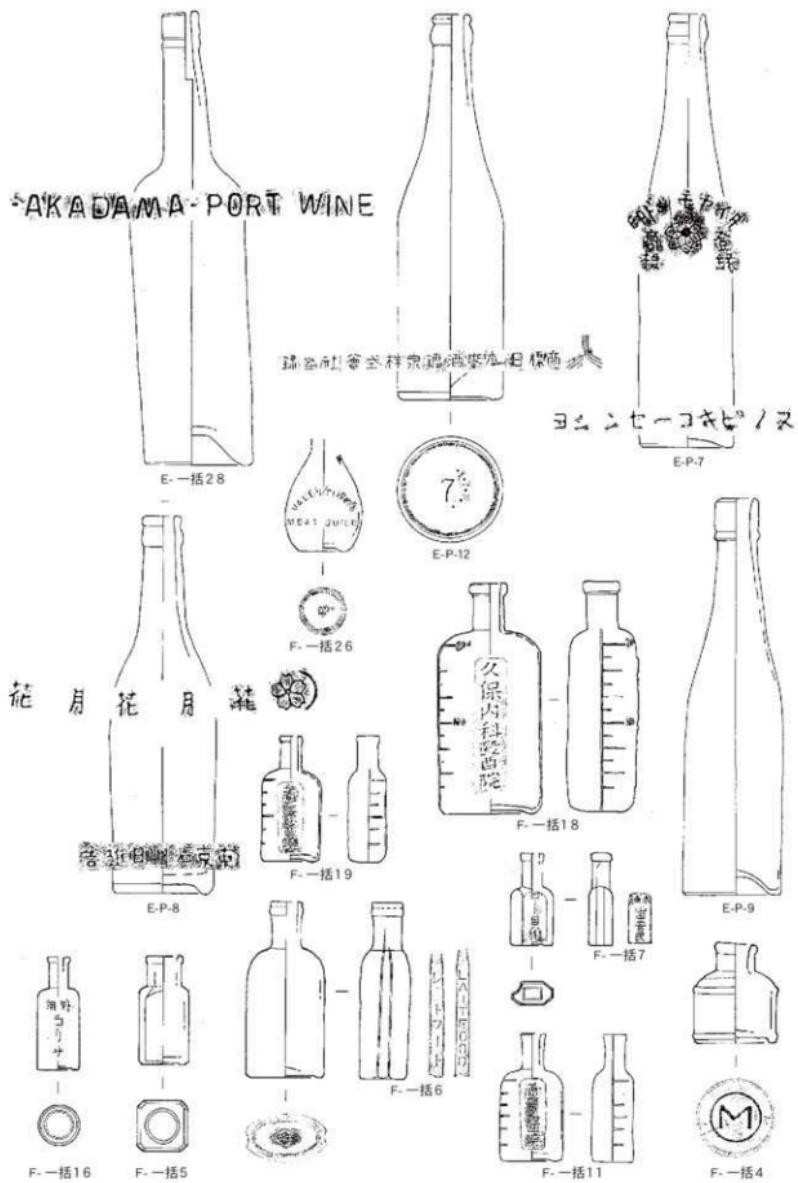


F-一括60

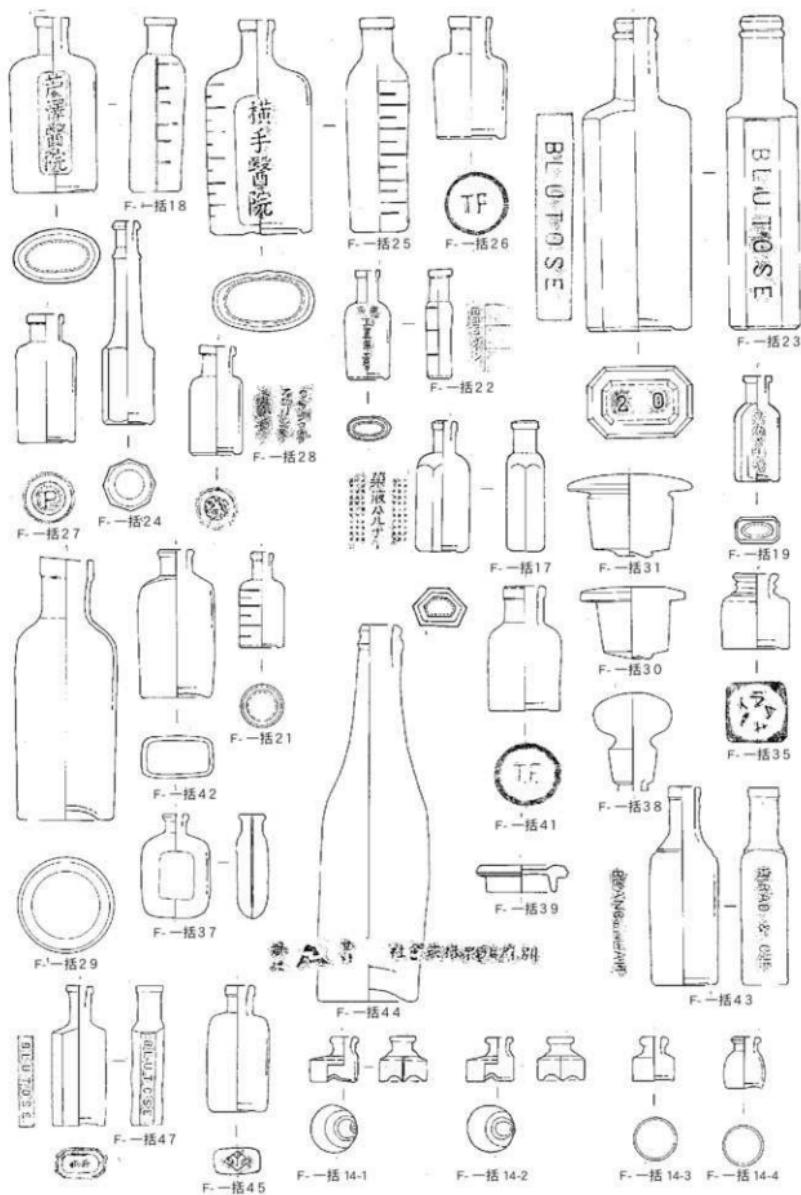
第19図 磁器 (6) ( $1/3$ )



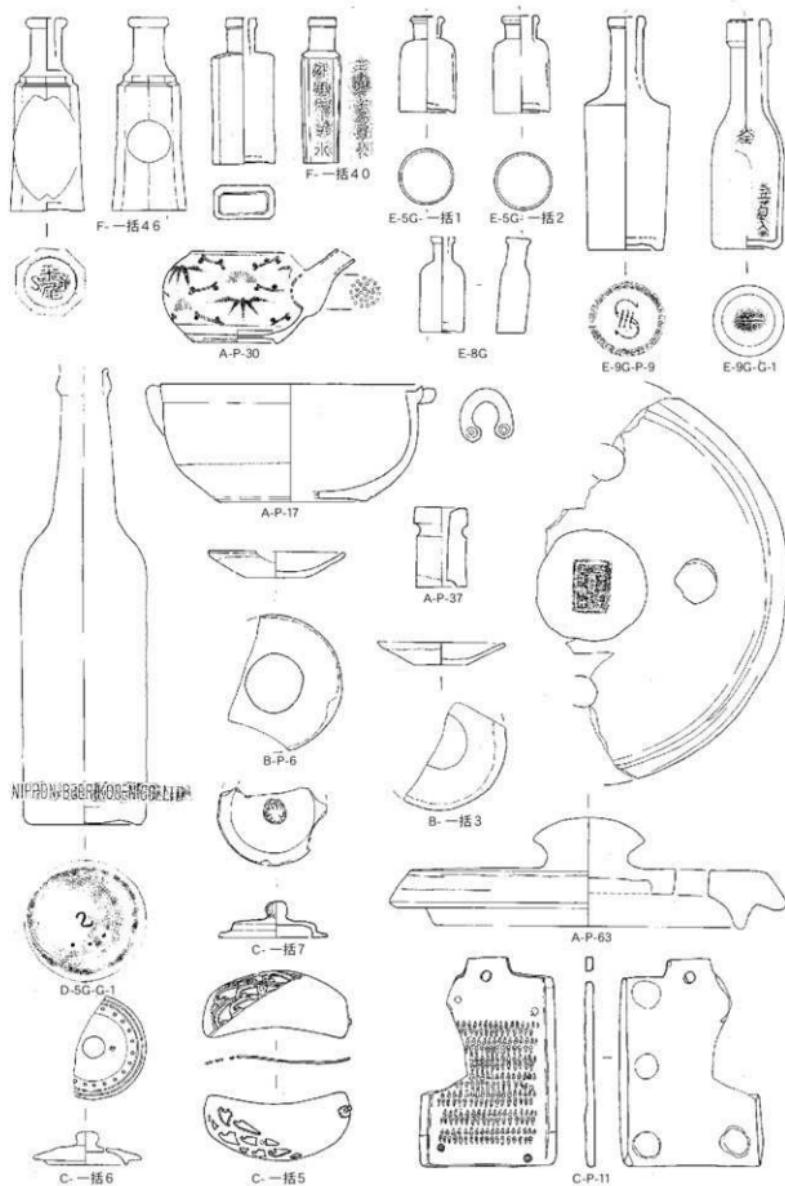
第20図 ガラス製品 (1) (1/3)



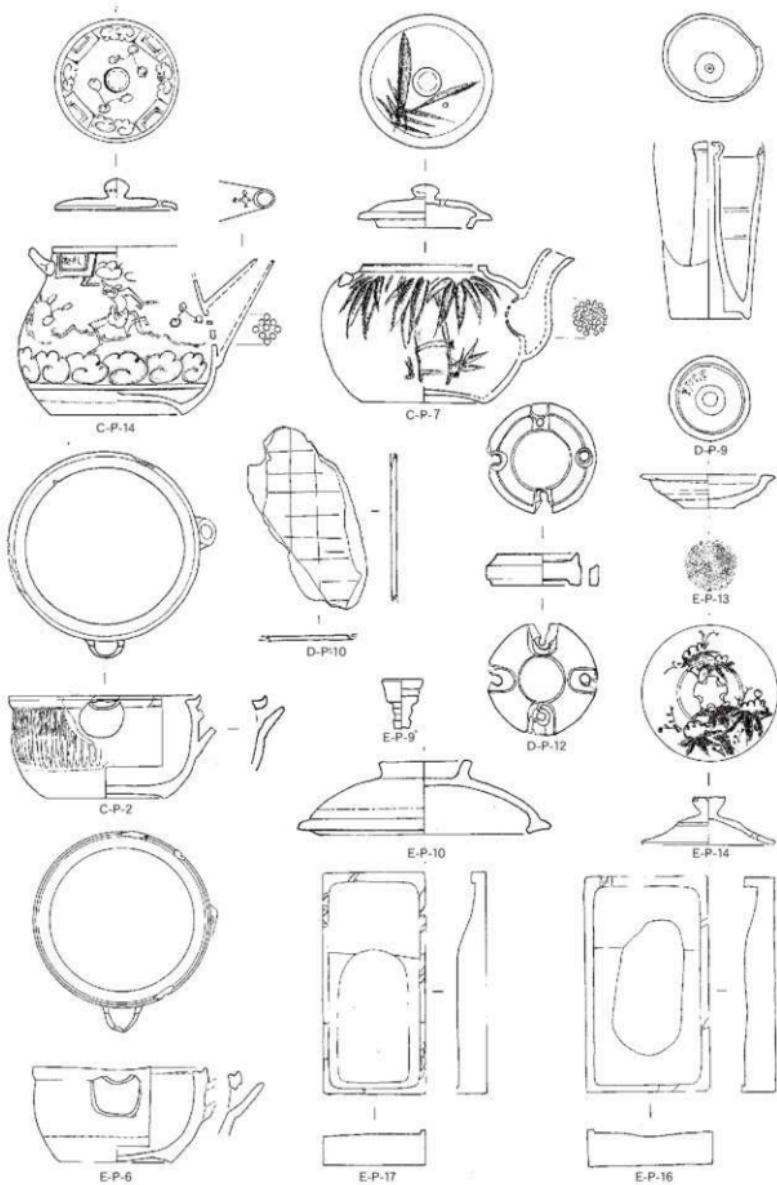
第21図 ガラス製品 (2) ( $\frac{1}{3}$ )



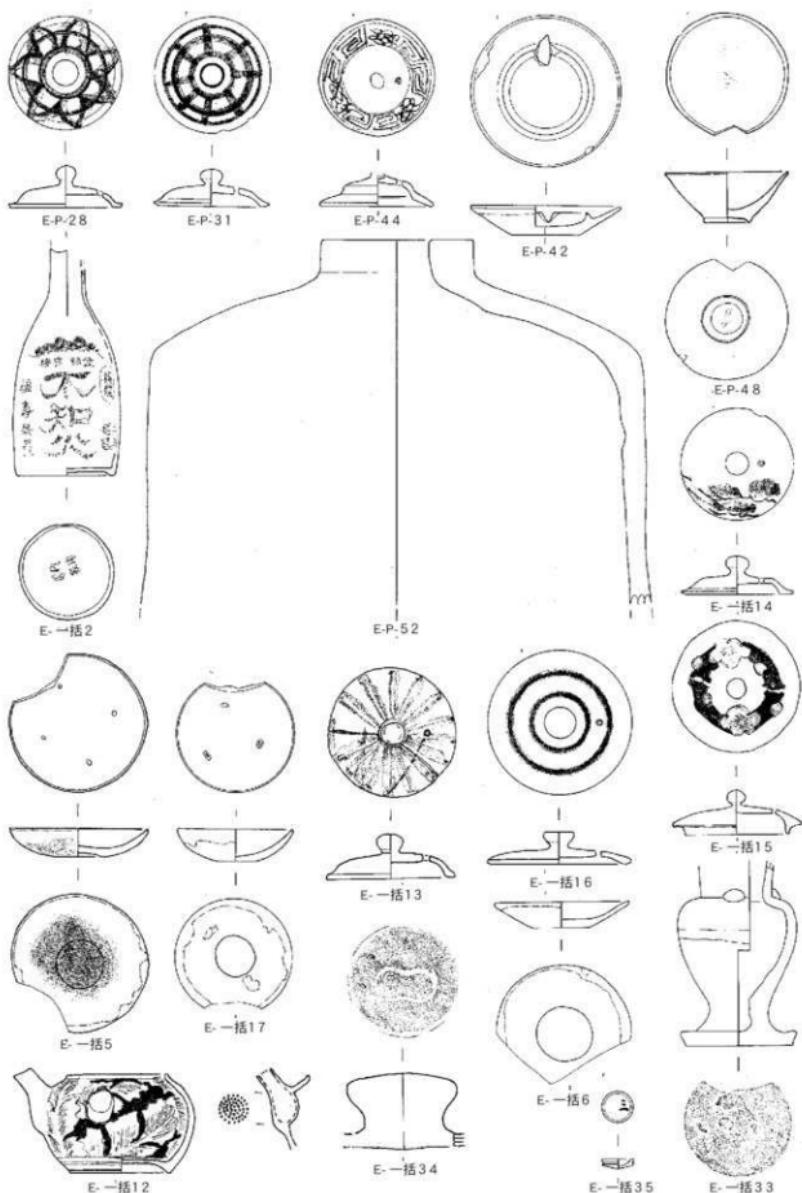
第22図 ガラス製品 (3) (1/3)



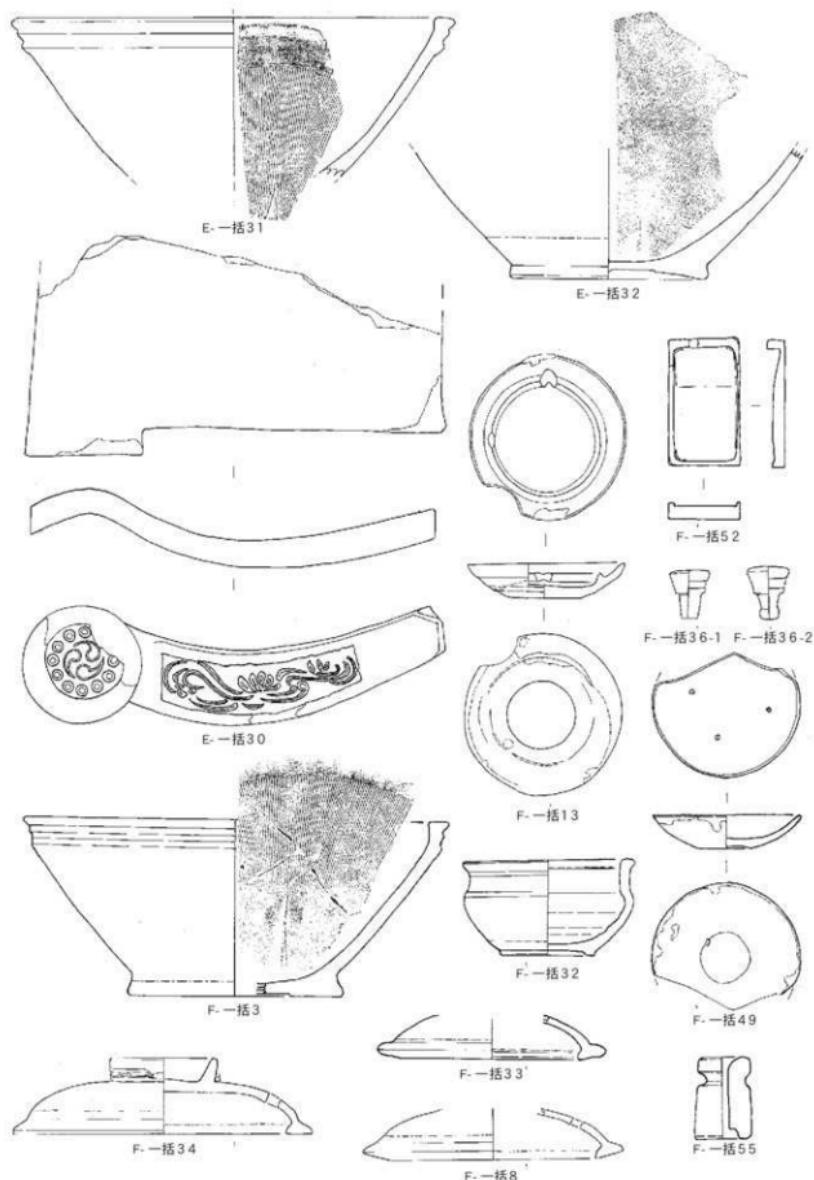
第23図 ガラス製品 (4)・陶磁器 (1) (1/3)



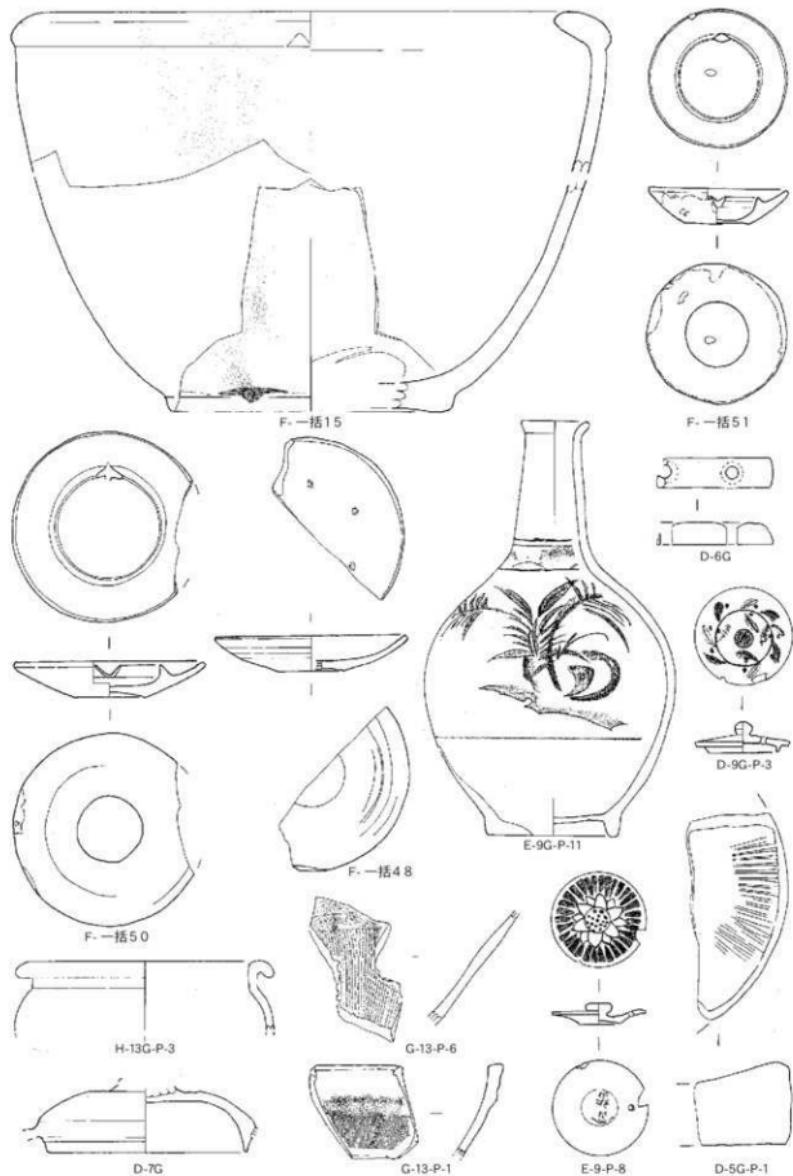
第24図 陶磁器（2）・石製品（1/3）



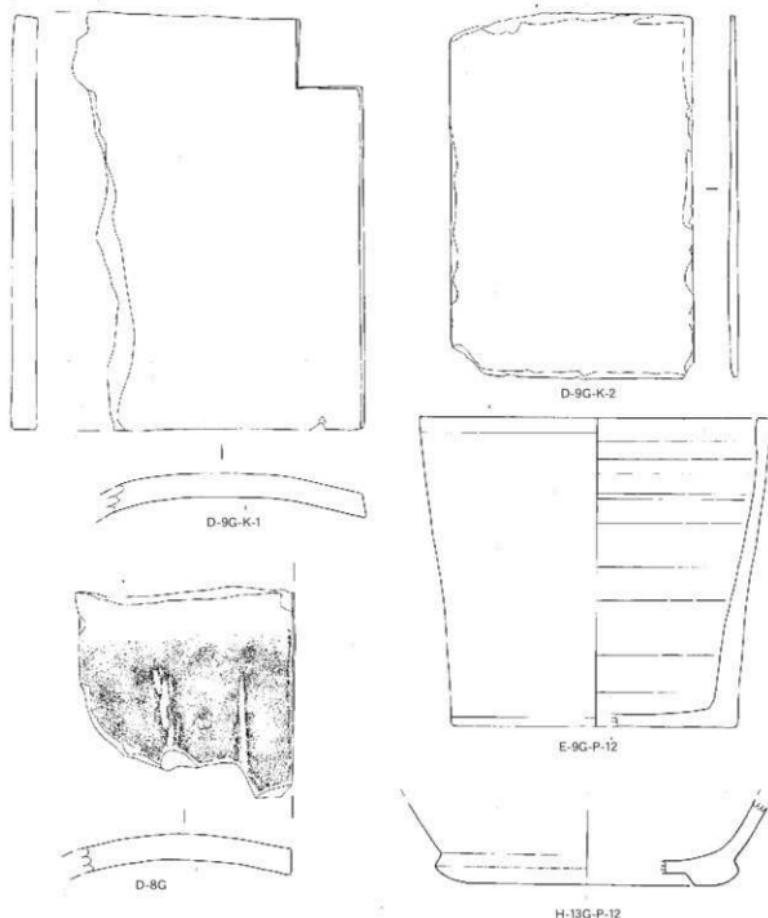
第25図 陶磁器 (3) (1/3)



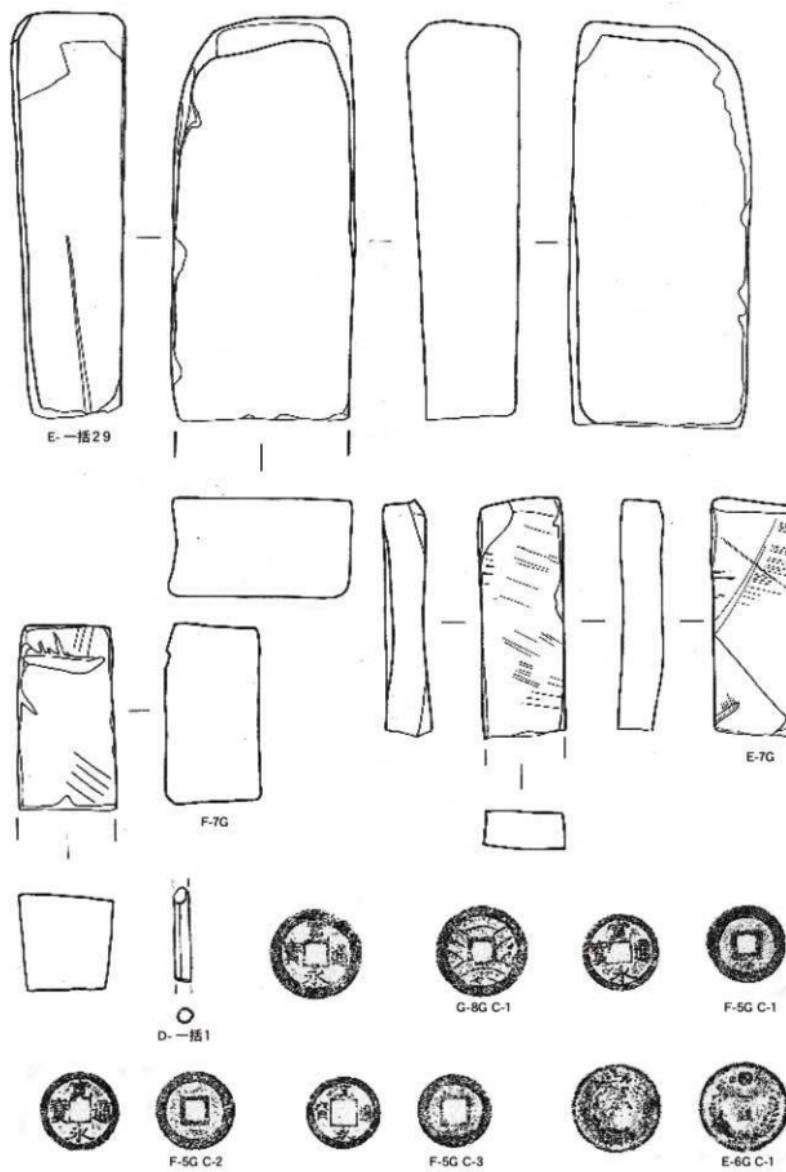
第26図 陶磁器 (4)・瓦・硯 ( $\frac{1}{3}$ )



第27図 陶磁器 (5) (1/3)



第28図 陶磁器 (6)・瓦・石板・植木鉢 (1/3)

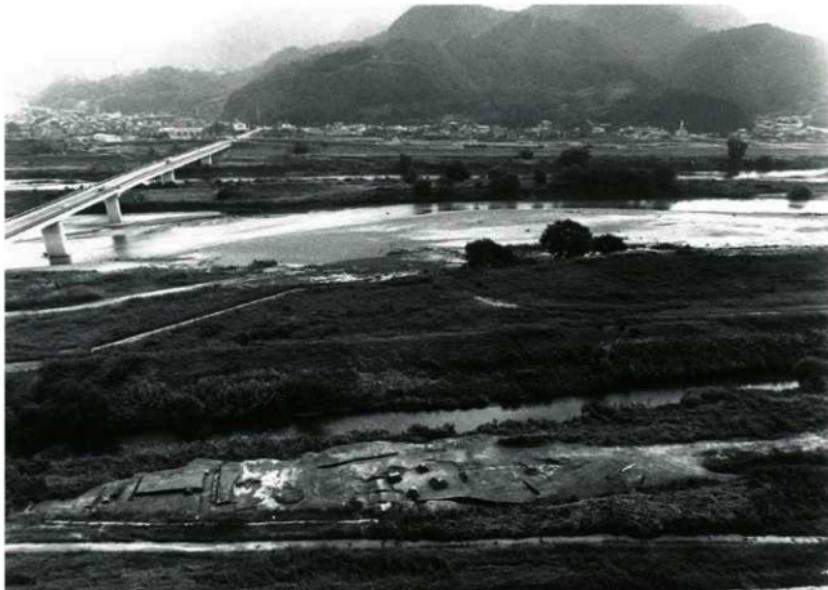


第29図 砧石・石筆および古銭 (2/3)



# 図 版



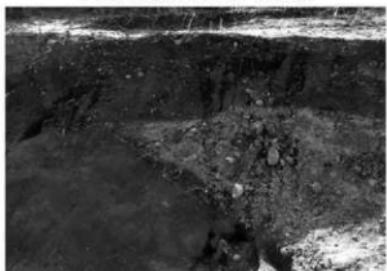




富士川大橋から調査区を撮影



土堤状の高まりと礫の状況



土堤状の高まりと礫の状況



埋め立て状況（斜めに混入している）



石垣検出状況



発掘調査区の状況



石垣の調査状況



石垣の調査状況



石垣の調査状況



石垣の調査状況



石垣北面の土層堆積状況



石垣北側の調査状況



石垣の調査状況



石垣の調査状況



石垣の調査状況



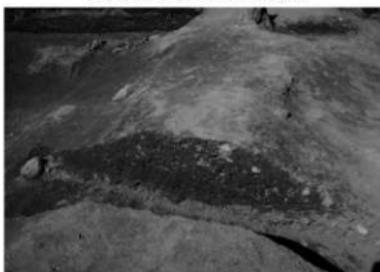
土堤状の高まりの調査状況



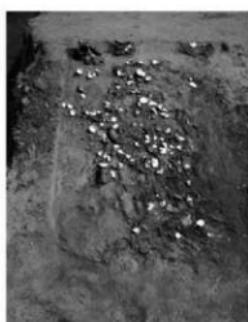
土堤状の高まりの調査状況



土堤状の高まりの調査状況



土堤状の高まりの断面



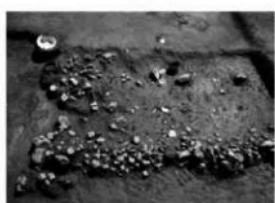
A ブロック出土状況



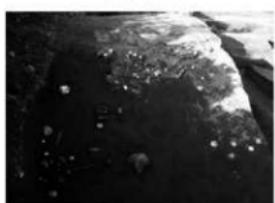
B ブロック出土状況



C ブロック出土状況



D ブロック出土状況



E ブロック出土状況



乾電池







E -- 括 38



E -- 括 40



E -- 括 41



E -- 括 42



E -- 括 43



E -- 括 44



E -- 括 45 E -- 括 46



E -- 括 47



E -- 括 48



E -- 括 49



E -- 括 50



E -- 括 51



E -- 括 52



F -- 括 56



F -- 括 57



F -- 括 58



F -- 括 59



E -- 括 39



F -- 括 60

F -- 括 60



B- 一括 2



B- 一括 4



B- 一括 5



B- 一括 6



C-P-6



C-P-17



C-P-19



E-P-7



E-P-8



E-P-9

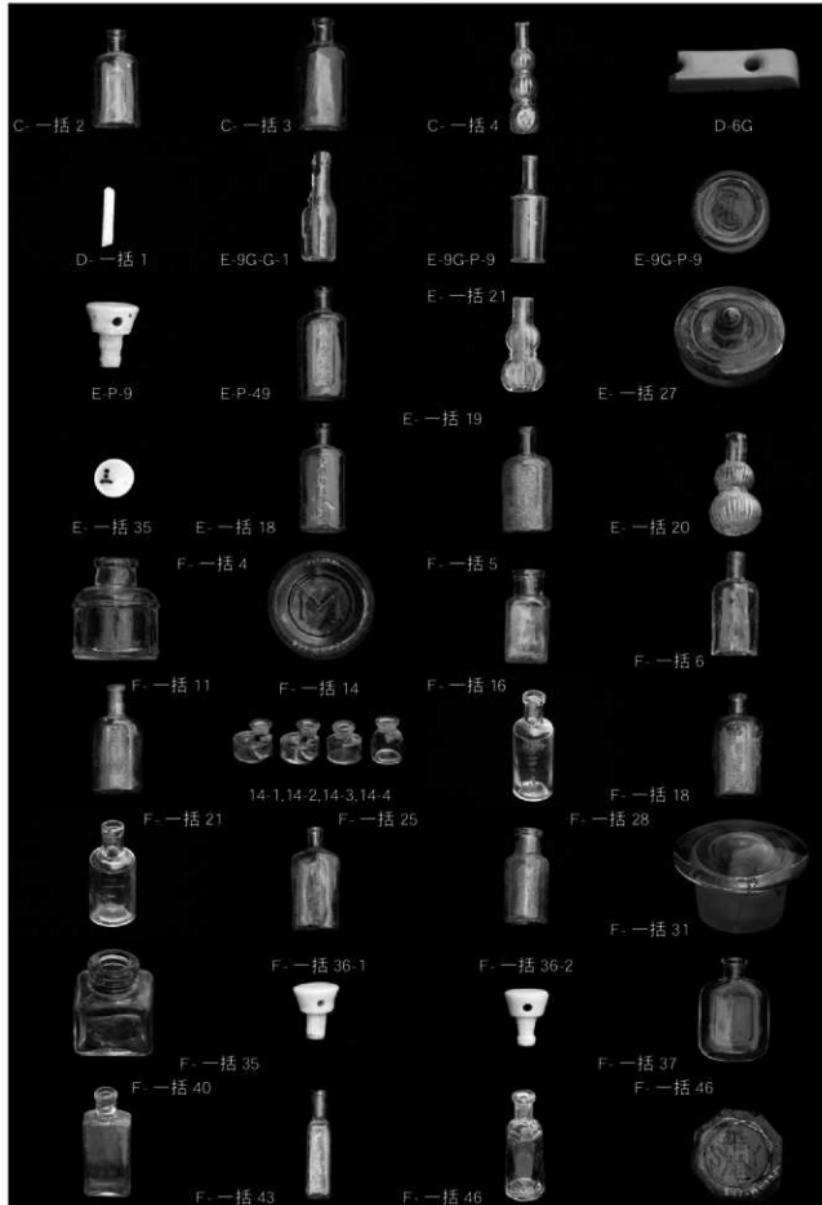


E-P-12









## 報告書抄録

ふりがな	あおやぎかしあと
書名	青柳河岸跡
副題	増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第259集
編著者名	山本茂樹・猪俣一弘
発行者	山梨県教育委員会・国土交通省関東地方整備局
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055(266)3016
印刷所	株式会社 島南堂印刷所
発行日	平成21年(2009)3月15日
所在地	山梨県南巨摩郡増穂町青柳 やまなしけんみなみこまぐんますほちょうあおやぎ 25,000分の1地形図 鯨沢 位置 東経138°28'28"北緯35°33'19" (世界測地系) 遺跡の中心 標高243.70m 市町村コード 361 遺跡番号 037
調査原因	増穂地区築堤護岸整備事業
調査期間	2007年6月4日~9月27日
調査面積	2,250m <sup>2</sup>
主な遺構	石垣1面、土堤状跡及び河岸お蔵道3面
主な出土物	江戸時代の陶磁器および明治時代以降の陶磁器類、古銭5枚、ガラス製品、石製品
特記事項	青柳河岸跡の本体へ続く道

### 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第259集

#### 青柳河岸跡

増穂地区築堤護岸整備事業に伴う青柳河岸跡発掘調査報告書

印刷日 平成21年(2009)3月10日

発行日 平成21年(2009)3月15日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055(266)3016

発行 山梨県教育委員会

国土交通省関東地方整備局

印刷所 株式会社島南堂印刷所